

十全同窓会会報

〒920-8640
金沢市宝町13の1
金沢大学医学部
十全同窓会会報
編集委員会
印刷／ヨシダ印刷(株)

(題字…中村信一 十全同窓会会長)

新年のご挨拶

十全同窓会会長 中村 信 一



新年あけましておめでとうございます。
同窓会会員の皆様には、お元気で新春をお迎えのことと、お慶び申し上げます。年頭にあたり、母校金沢大学医学類ならびに十全同窓会の発展と、会員の皆様のご健勝、ご活躍をお祈りいたします。本年は母校創立百五十四周年、同窓会発足八十四周年になります。同窓会発足時の趣意書には「一つは母校の正しき発展の擁護の為と一つは吾々同窓の協力に依る社会的発展を期せむが為に真に生命力あり力ある同窓会の出現を衷心より希ふ所なり。」とあります。このことを新しい

年の初めにあたり、改めて、胸に刻みたく存じます。

昨年は、本部ならびに各県支部の役員をはじめ会員の皆様から暖かいご支援・ご協力を賜り、深く感謝いたしております。また、三年に一度の同窓会会員名簿発行の年であり、名簿編集委員、調査担当者のご努力はもとより、全会員のご協力を賜り、昨年末に新同窓会会員名簿を皆様のお手元にお届けすることが出来ました。関係された皆様方に厚く御礼申し上げます。本年も、会員相互の親睦の増進、十全同窓会報の充実、学生課外活動や医学図書館への補助・整備補助等、基幹的同窓会事業の着実な推進に努める所存でございます。特に、各地の支部との連携を計り、母校の発展と会員の皆様のご活躍に役立てたいと考えています。昨年は岩手支部総会が三年振りに開催される等、十五支部の総会が開催され、参加人数は約三百五十名にも及びました。本年は、会員数が非常に

多い富山支部の総会が久しぶりに開催されることで嬉しい限りです。

年頭にあたり、昨年及び本年の母校と同窓会に関係したことを幾つか紹介させていただきます。第一には、医学部創立百五十周年事業の掉尾を飾る「十全講堂から正門までのメインプロムナードの総合的整備事業（十全同窓会からの寄付、金沢市、国費による）」が、昨年十月に完成したことです。関連して、「医学部記念館の改修工事」が昨年三月に完了しました。昨年の総会でご承認頂きました本同窓会からの寄付により、展示室内のショーケースも一新されました。また、附属病院の環境整備事業も本年中には完了する予定です。完了した暁には、病院正面玄関前にバス停が設置され、駐車場も整備されることから、来院者の利便性が格段に向上するとともに、交通の混雑が解消されることが期待されます。多くの会員の皆様が新装なった宝町キャンパスへご来訪され、母校を励まして頂きたく存じます。第二には、「三大学共同大学院（先進予防医学研究科）」設置の件です。本事業は平成二十四年度に文部科学省の「国立大学改革強化推進事業」に採択された事業であり、四年間の準備期間を経て、金沢大学を代表校とする、千葉大学・金沢大学・長崎大学の共同大学院が、いよいよ本年四月に第一期生を受け入れます。準備期間中におけるWHOへの教員派遣事業も文部科学省から高く評価されており、本大学院が順調に発展することを願っています。第三は、本年度から六年間に亘る「第三期中期目標・中期計画」の件です。金沢大学は文部科学省が提示した運営費交付金配分の「三

類型」の中の「重点支援、世界卓越型」（卓越した成果を創出している海外大学と伍して、全学的に世界で卓越した教育研究、社会実践（研究開発成果を社会に生かすこと）を推進する取り組みを第三期の機能強化の中核とする国立大）を選択しました。医学類・医学系におきましては中核として金沢大学を牽引されることを強く願っています。最後に、本年も会員の皆様にとつて、また、母校ならびに同窓会にとつて、よい年になりますよう祈念し、年頭のご挨拶とさせていただきます。

目次

新年のご挨拶	1
就任挨拶	2
受賞	2
秋の叙勲	3
学会報告等	3
教授退職記念講演会のお報せ	3
論説	4
病院紹介	5
教室だより	7
十全学術行脚	9
支部だより	10
クラス会	14
同窓生の消息	19
十全歴史ひろば	20
学生課外活動支援報告	21
十全昔話	24
学生コーナー	25
編集後記	26

就任挨拶

藤井 秀樹博士（昭和五十四年卒業）
山梨大学理事・副学長・附属病院長に就任

療レベルは満足できるものではありません。したがって、私も努力すべきは、地域医療の再編とそれを支えるべき医療人の育成にほかならないと考えています。一方で大学理事として地方大学がおかれている厳しい状況に常に対峙してゆかねばなりません。大学運営に附属病院がどう貢献してゆけるのかという観点も大切だと考えています。最後に十全同窓会の皆様のおすすめの発展を祈念申し上げますとともに、一層のご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

昭和五十四年に金沢大学を卒業後京都大学外科に入局し、その後昭和三十八年卒業の松本由朗先生が山梨医科大学の助教授に就任されたのを機に外科学第一講座に入局しました。平成十五年に教授に就任し、平成二十七年四月一日付で山梨大学理事、副学長、附属病院長を拝命いたしました。私どもの附属病院は今年で開院三十二年を迎えますが、狭隘な外来・病棟での診療を余儀なくされ、副病院長であった八年前から文部科学省と交渉し、いわゆる新設医大では福井大学について広い二万一千平米の新病棟がこの六月に竣工し十二月に稼動を始めました。山梨県は人口八十数万人の小県ですが、小さな病院が乱立しその医



受賞

医薬保健学総合研究科長・医学系長

金子 周一（昭和五十七年卒業）

金沢市文化賞 受賞

平成二十七年十一月三日（文化の日）に第六十九回金沢市文化賞を受賞致しました。この賞は、私が仰ぎ見てきた十全同窓会の先輩方が受賞をしておられ、私にとって、誠に名誉なことでありました。ここに、ともに教育と研究をしてくださった多くの先輩、同僚、そして十全同窓会員の皆様に感謝申し上げます。

「永年にわたり肝臓の研究を通じて『新しい内科学の構築に尽力してきた』として表彰されました。肝臓と糖尿病・脂質異常症・がんなどの内科疾患との関連を解明し、世界に先駆けて肝臓が産生するホルモンを発見し、肝臓からみた内

産学連携功労者表彰

経済産業大臣賞 受賞

この度、『血液の遺伝子発現解析による消化器がんスクリーニング技術』の開発の課題で第十三回産学官連携功労者表彰経済産業大臣賞を受賞致しました。この賞は研究成果を企業とともに事業化したことに對して与えられたものであり、この間、北陸の関連病院の先生方、先輩、そして同僚に多大なるご協力をいただきました。

従来の腫瘍マーカーの測定は、腫瘍が作り出す蛋白や核酸を測定するため、小さながんを診断することは原理的にも限界がありました。本方法はがんに対する生体の免疫監視機構を利用したものであり、これまでの方法とは原理的に大きく異なります。私たちは、免疫系は小さな

科学を研究してまいりました。また、肝臓がんの研究をするうちに、免疫監視機構を用いた画期的ながんの血液診断法の開発に成功しました。

教育では内科学の教授として『若い頃に、新たな医療の進歩にわずかでも関与する経験を重ねることが、良い医師を育てる方法である』という信念のもと、多くの若い医師に最先端の研究を指導し、医療進歩の重要性を理解する優秀な後進の育成に取り組んできたこと、そして国内だけでなくWHO・中国・モンゴルなど国外の医療の発展にも携わることができたことも評価をいただきました。今後も我が国、および世界の医学と医療の進歩を求めて、さらに後進の育成と研究に取り組んで参りたいと存じます。

がんであっても常に監視しており、その局所における反応が血液内の細胞にも見いだされることを明らかにし、これを検出する方法を確立しました。この技術の確立に対して平成二十五年度発明協会発明賞を、原理の発見に対して平成二十六年度文部科学大臣表彰 科学技術賞をいただきました。そして、長らくの付き合いである株式会社キュービックスの丹野社長が、苦勞して事業化してくれたことが、今回のふたりの受賞につながりました。

現在、医薬品医療機器総合機構の対面助言を終え、医師主導臨床治験を実施しています。今回の受賞を励みに、免疫学の進歩に寄与すること、そして、がんの早期発見に貢献することを進めてまいりたいと思います。

学会報告等

秋の叙勲

紫綬褒章

狩野 方伸 (特別会員)

藍綬褒章

野田 八嗣 (昭和五十二年卒業)

瑞宝中綬章

吉光 外宏 (昭和三十七年卒業)

小野 武年 (大学院)

旭日双光章

西村 功 (昭和四十三年卒業)

佐々木紘昭 (昭和四十六年卒業)

瑞宝双光章

田中 道夫 (昭和三十四年卒業)

第六十八回日本医師会設立記念医学大会
日本医師会最高優功賞 受賞
瀧 邦彦 (昭和十九年卒業)

第七十七回
日本血液学会学術集会

平成二十七年十月十六日〜十八日の三日間、石川県立音楽堂など金沢駅前前の五施設を用いて、第七十七回日本血液学会学術集会(会長・中尾眞二教授)を開催いたしました。宿不足が懸念されておりましたが、約五千七百名の参加を得て、盛会裏に終えることができました。

今回のテーマは「Learning human biology from patients」。臨床医が科学的な目で診療に携わることによって見出されてきた新知見から、また新たなアイデアを生み出していくという中尾教授の思いが込められていたと思います。

特別講演は、中尾教授のボスであるNIHのYoung博士にお願いいたしました。講演終了後、先生のたつての希望でポルト部の学生さんたちと河北潟に繰り出しました。また、米国血液学会(ASH)会長のWilliams博士、ヨーロッパ血液学会(EHA)会長のGreen博士にそれぞれスベシャルレクチャーを頂き、ASH/JSH・EHA/JSHジョイントシンポジウムではそれぞれ「造血幹細胞移植のドナー選択—Haplo vs Cord Blood」、DICの基礎と臨床」が企画されました。また、リンパ系腫瘍をテーマに、アジア各国の専門家とのパネルディスカッションもありました。さらに、ASHのエキスパートをコメンテーターとした、若手会員によるScientific Exchange Training Program (SETP) も開催されました。ポスターセッションでは議論を活性化するために、従来一斉に行っていた演者に

よるプレゼンテーションは廃止し、代わりに演者には三十分間ポスター前に待機していただき、参加者としてくくり議論をしていただくようにいたしました。議論が盛り上がるか心配しておりましたが、終了後のアンケートでは多数の方に賛同いただきました。

最終日の市民公開講座では、当院の血液疾患患者会「萌の会」代表の和田真由美さんに司会をお願いし、「就労」をテーマとした活発な意見交換がありました。「もてなし企画」もいくつか用意しました。料理の追加が必要になった懇親会では、石川の日本酒コーナーを設けました。法被姿の秘書たちも華を添えました。



女性太鼓奏者「炎太鼓」による力強いばちさばきには拍手喝采でした。また、ポスターセッションでは、金沢スィーツと称した和菓子のプレゼントを企画。男性会員にも大好評であったようです。

金沢では昭和五十二年の日本血液学会(服部絢一先生)、昭和五十六年(服部絢一先生)・平成十年(松田保先生)の日本臨床血液学会に引き続き、四回目の開催でしたが、今回も記憶に残る学術集会になったものと自負しております。

本総会の開催にあたっては第三内科同門の先生方をはじめ、十全同窓会先輩諸氏のご支援を頂きました。深謝致します。(山崎 宏人 記)

教授退職記念講演会のお報せ

謹 啓 時下ますます御清栄のこととお慶び申し上げます
さて 金沢大学医薬保健研究域医学系(集学的治療学研究分野(旧泌尿器科学))並木幹夫教授におかれましては 平成二十八年三月三十一日をもって医学系教授を退職されます
それに際しまして その御高徳と御功績に対し感謝の意を表したいと存じまして退職記念会を発足させ 左記のとおり記念講演会を挙行することになりました
つきましては 御多用のところ誠に恐縮ですが 記念講演会への御臨席を賜りますようお願い申し上げます
謹 白

記

記念講演会

日時 平成二十八年三月八日(火) 午後五時から
場所 医学類G棟二階 第三講義室
演題 「泌尿器科医として夢を信じて歩んだ四十年」

事務担当 医薬保健系事務部総務課医学総務係(電話番号 〇七六・二六五・二二〇〇)

並木 幹夫 教授 退任記念会 実行委員長 金子 周一

並木 幹夫 教授

グローバル化・シミュレーション時代における

医師養成課程の質保証と医学教育改革

医学教育の国際認証を本学はどう迎えるか

医学教育研究センター 八木 邦公 (平成二年卒業)

(要旨)

国際認証は、現在我が国の医学教育の最重要課題である。我が国において国際認証は大学医学教育の分野別認証を担い、参加型臨床実習およびアウトカム基盤型教育の徹底を目指す。本学も二〇一九 (平成三十一) 年度前後の受審を目指して準備を開始している。

I. 国際認証に至る米国の経緯

発端はEducational Commission for Foreign Medical Graduates (ECFMG) が二〇一〇年九月二十一日付けで示した通達である。米国で臨床医を目指すUSMLE (United States Medical Licensing Examination) step 3の受験資格であるECFMG CERTIFICATIONが、二〇一三年以降には、適切に品質認定された医学部の卒業生にしか与えられなくなる。全世界の医学部はこの条件を満たすために、Liaison Committee on Medical Education (LCME) が定めた米国の基準か、世界的に認められているWorld Federation for Medical Education (WFME) の基準や同等の認証手続きによる認定を受けねばならなかった。(http://www.ecfm.org/forms/9212010.press.release.pdf)

ECFMGは理由として、LCMEやCACMSが基準を設けている米国・カナダ以外の国には教育内容の保証がないことを挙げている。特に二〇〇〇年前後以降「乱立」しているカリブ海諸国等の「医学校」は、裕福ではあるが、米本土では医学学校のハードルが高い家庭の子弟を受け入れる営利主義的運営がなされている。医学教育はヘルスケアの質に直結するため、米国・カナダ以外の医学学校卒業生から米国民の健康を守る、という大義名分である。

II. 日本での国際認証に至る経緯

ECFMGは米国・カナダ以外の医学部卒業生が米国で医療を行う際の資格審査を行う機関であるが、所詮フィラデルフィアに存在するNPOに過ぎない。また我が国からのUSMLE受験者は年平均六十一八十名である。それでも日本の全八十医学校のうち「適切な品質認定」を受けたものが一つも無かったことから「黒船」として受け止められた。

最初は衝撃であったが、メディカルツーリズムなどの面で医学教育のグローバル化が必要な時代に、大学教育の質の担保への社会的要請も重なり、国際認証に事実上の医学教育の分野別認

証評価の役割を担わせようとする機運が生じた。文部科学省平成二十四年度大学改革推進等補助金「基礎・臨床を両輪とした医学教育改革によるグローバルな医師養成」でこの流れが定着した。

現時点では我が国にはLCMEやWFMEと同等の認証を行える機関は存在していない。そのため二〇一二 (平成二十四) 年十月に最初に受審した東京女子医大はWFMEの地域部会である西太平洋地区医学教育連盟による国際外部評価を受けた。それ以降は文科省プロジェクト参加大学での国内パイロット評価の形を取っている。現在までに東京女子医大に続き、二〇一三年度に新潟大、東京医科歯科大、二〇一四年度に東京慈恵医大、千葉大、東大が受審を済ませている。認証機関として日本医学教育評価機構 (Japan Accreditation Council for Medical Education, JACME) が近々設立され (二〇一五年四月時点で、今年秋とアナウンスあり) 来年度中盤からはJACMEが認証手続きを行う。

三. 本学における喫緊の課題

改善の基本は、①臨床実習を診療参加型にすること、②教育全体のスタイルをアウトカム基盤型とすることである。

①は従来の見学型ではなく、診療スタッフの一員として「参加させる」実習である。臨床実習の期間も七十二週以上が目安とされている (現在は約五十週)。当然大病院のみでなく関連病院を含めた指導体制の構築、指導医層の底上げが要求される。ただし負担増のみではなく、緊急時のファーストタッチ・回診等を積極的にこなせることで、スタッフの負担を軽減しつ

つ、学生は現在の初期研修医の非侵襲的部分を研修することができるとある。

今年一月に文科省は医療系大学間共用試験実施評価機構主導で二〇二〇 (平成三十二年) 年より臨床実技試験 (post clinical clerkship (PCC) OSCE: いわゆるAdvanced OSCE) を卒業要件とする方針を示した。参加型臨床実習の普及と並行して議論が進むと思われる。

②は、到達目標を決めての教育である。従来はどうしても教育者側の教えた内容や興味に従ったカリキュラムになりがちで、適当な専門家が不在であるためこの科目は省略という判断すらあり得たが、そうではなく、最終的に学生がこの内容をこのレベルで習得しなければならないから、この段階でこの指導を行わなければならない、といった形でカリキュラム作成を進めていくことがアウトカム基盤型教育である。

国際認証の受審で具体的に言うことは「医学教育分野別評価基準日本版」に従っての九項目 (一. 使命と教育成果、二. 教育プログラム、三. 学生評価、四. 学生、五. 教員、六. 教育資源、七. プログラム評価、八. 統轄および管理運営、九. 継続的改良) の自己点検で、教育の問題点を認識し、改善の方策を立てる。審査は一回で終了ではなく、七年毎に再審査される。次回までに方策が実施・達成されることが期待される。

本学では現在、参加型臨床実習導入を軸にカリキュラムの改善準備が進んでいる。二〇一九 (平成三十一) 年度前後に受審となるものと推測される。今後医学教育への意識が高まり、教育改革が進んで実効を挙げることが期待したい。

病院紹介

国家公務員共済組合連合会 北陸病院

【沿革・概要】

当院は昭和三十一年十一月に、金沢市南端に開設され、以来五十余年にわたり国家公務員並びに地域住民の方々に医療サービスを提供してまいりました。当初は、当時の国民病であった肺結核に対処する病院でしたが、昭和三十八年からは一般病棟も新設され、その後結核病棟を廃止して現在に至っています。平成十四年には、現地に建て替え工事を完了しております。同時に最新医療機器も導入し、高度の画像診断に対応してきました。近隣には総合病院が密集、競合する激戦地です。許可病床数百二十五床（稼働病床百二十四床）と大病院ではありませんが、反面、小回りの利くことを武器に地域の皆さまに質の高い、安全な医療を提供できるよう、職員一同日夜努力を重ねています。

診療科は内科、消化器科、循環器科、外科、整形外科、泌尿器科、放射線科、心臓血管外科、呼吸器外科、肛門外科、麻酔科、健診センターであり、職員数は常勤医師十七名を含め約二百五十名です。金沢大学のご援助により、診療部門の強化を図ってまいりました。平成二十四年度は放射線科医が常勤および整形外科医が増員（二名体制）、リウマチ内科医が常勤となっています。平成二十六

年度には麻酔科医が常勤および内分泌内科医が増員（二名体制）、消化器内科医が増員（三名体制）となっています。

平成二十一年五月電子カルテ稼働、平成二十一年七月DPC対象病院、平成二十三年五月7・1看護体制取得、平成二十三年六月病院機能評価（MOT）更新認定など急性期病院としての体制化を進めてきました。診療録の電子化では、平成二十四年四月からフィルムレスの導入、内視鏡画像配信を施行しております。いしかわ診療情報共有ネットワークに参加し、平成二十六年三月から運用開始となっております。これは診療所から病院あるいは病院と病院間で患者情報を共有するもので、病院の垣根を越えた画期的な事業と思います。また平成二十七年四月から画像ビューアおよび健康管理センター電子カルテシステムの更新を行っております。

平均在院日数は、診療報酬改定の度に短くなっており最終的には十日〜十五日程度になると思われます。平均在院日数短縮化のなかで、病床利用率を維持するためには、地域医療連携、金沢大学附属病院との連携、施設との連携が鍵になると考えています。当院の理念は、「地域の皆さまから、親しまれ、信頼される病院をめざします」であり、地域密着型を基本としています。地域の先生方との交流には特に力を入れています。地域医療連携では、診療所の先生方を交えての病診連携の会（年二回）、開放型病院運営委員会および懇親会（年一回）を開催しています。病院・診療所等への挨拶回りは私が赴任する前から行われていましたが、引き続き力を入れて行っています。

特記すべきは介護施設等への挨拶回りです。当院は病床数が少なく、入院もさることながら退院支援も重要で、施設との連携にも力を入れています。在宅復帰率をクリアするためにも今後ますます重要になってくると思われまます。地域住民とのコミュニケーションを高めるよう健康フェスティバルも秋に開催しています。

【将来のビジョン】

平成二年（一九九〇）頃の日本の人口ピラミッドは三十歳後半から六十歳頃が中心であり、多くの病気が治せた頃で、医療は治すこと、救うことでした。しかし超高齢者社会を迎えるにあたり、多くの病気を治せなくなる

時代となり、医療は「治すこと、救うこと」から「癒すこと、抱えて生きること」へと変化しつつあります。超高齢者社会では、医療と介護、生活の境界があいまいになっていくため、医療・介護・生活を一体的に保証する「地域包括ケアシステム」の実現、病院中心から在宅・地域医療へのシフト（競争から共生へ）が求められています。そういうニーズに応えて北陸病院においても平成二十八年一月より、一病棟丸ごと（四十床）地域包括ケア病棟にする予定です。医師や経営陣、医療スタッフだけでなく、事務、技術など

病院スタッフが丸となって、積極的に病院の将来図を構想する必要があると思います。

【そのほかの活動状況】

以前から不評だった駐車場を平成二十四年六月、平成二十七年四月に整備し、駐車可能台数を増やしました。その結果、外来患者数の増加につながりました。当院には、老朽化した病棟（南館）が残っています。この病棟の建て替えも平成三十年ころをメドにプランニングしている状況です。今後とも北陸病院にご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

（院長 飯田 茂穂 記）



病院紹介

社会福祉法人恩賜財団済生会
富山県済生会富山病院

済生会富山県支部は昭和六年七月に発足し、当初は医療券を発行し日赤に委託して巡回診療を行っていました。昭和十年四月に富山市桜町に富山病院が開設され、内科、外科、小児科の診療を行い、病床数は二十床でした。昭和二十年八月、富山市は米軍の空襲を受け、当院ばかりでなく市街のほとんどが灰燼に帰してしまいます。そのため空襲を免れた高岡市に移転し診療を継続することになりました。戦後の復興に当たり、昭和二十一年十一月富山県は富山市安住町に県立産育院（産婦人科）を開設、二十三年三月富山県厚生病院と改称し、診療科として内科、外科、小児科を加え、済生会富山県支部が経営を受託しました。この時、高岡で行っていた事業は高岡病院として引き継がれます。以降、病棟を増築、診療科を増設しつつ規模を拡大し、昭和四十三年四月富山県済生会富山病院と改称し、総合病院として認可されました。平成九年一月市の中心部から現在の地（富山市楠木）に移転いたしました。富山市東北部の地域医療を担うばかりでなく、県立中央病院、富山市民病院、富山赤十字病院、富山大学附属病院とともに富山医療圏の二次救急輪番を担当しています。

標榜診療科は十八科（内科、循環器内

科、消化器内科、神経内科、小児科、外科、消化器外科、整形外科、脳神経外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、麻酔科、リハビリテーション科、放射線科、歯科口腔外科）で、その他に脳卒中センター、人工透析センター、消化器内視鏡センター、人工関節センターなどを設置しています。病床数は二百五十で、平成十九年五月脳卒中センターに県内唯一のSCU（六床）を開設し、二十四時間三百六十五日急性期脳卒中患者さんを受け入れており、富山医療圏の脳卒中診療の中心的機能を果たしています（日本経済新聞の実力病院調査で脳卒中治療の実力病院として北陸地方では唯一取り上げられました。平成二十五年三月二十一日付）。CT装置二台（うち一台は三百二十列）とMRI装置一台で対応してきましたが、本年MRI装置をもう一台追加することになりました。教育的活動の一環として二日がかりの脳卒中合宿セミナーを平成二十年から毎年開催し、平成二十七年は県外を含め二百二十名の医療関係者に参加頂きました。常勤医は院長を含め三十九名です。現在地へ移転当時は二百八十七名であった職員数は現在五百十一名（臨時職員七十三名を含む）となり、手狭になってきました。通常の診療業務の他に済生会として刑余者に対する地域生活定着支援センター事業などにも力を注いでいます。

初代の院長は長谷田義平先生で、市中心部の旧病院から現在の新病院への移転に尽力されたのが十一代院長の金山隆一先生です。金山先生は金沢大学昭和三十四年卒業で、第一内科の所属、金沢医大教授を経て昭和五十八年十一月から

平成十二年三月まで、十六年余り院長として当院の発展にご尽力いただきました。同年六月名誉院長に就任されました。（後にも先にも当院の名誉院長は金山先生お一人です）。金山先生の後には、辻政彦先生（金沢大学医学部卒業、第二外科、富山県立中央病院院長）、利波紀久先生（金沢大学医学部卒業、核医学教授・病院長、院長退任後は富山県済生会支部長）、三崎拓郎先生（札幌医大卒、金沢大学医学部第一外科、富大教授）と十全同窓会関係者が院長を務めています。

病院の規模の拡充に加え、新臨床研修医制度の影響で医師の確保に当院も苦労しています。以前は十全同窓会関係者が多かったのですが、背に腹は代えられず、富山大学（富山医科薬科大学）の医局からの医師が次第に増加してきています。現在金大の医局から派遣して頂いているのは、三十九名の常勤医師のうち整形外科の四名です。整形外科は人工関節センターを併設し、当院の診療を支える基幹の診療科です。当院の平成二十六年度の手術件数は二千二百件余りで、整形外科が最多（七百三十一件）で全体の三分の一を占めています。初期研修を平成二十七年年度に開始した医師から新しい専門医制度の対象になります。大学病院だけでは専門医試験受験に必要な症例の経験が難

しく、関連病院との連携が不可欠になります。現在、当院の十全会関係者は以前ほど多くはありませんが、専門医教育の現場として微力ながら協力させていただきたいと思います。これまでの長いお付き合い同様、今後ともよろしくお願いいたします。

（院長 井上 博 記）



教室だより

ウイルス感染症制御学
(旧国際環境保健学)

「教室の沿革」一九九九年五月に市村宏教授の赴任により国際環境保健学教室として誕生した当教室は、独立法人化に伴いウイルス感染症制御学教室と名称を新たにし、本年で十七年目を迎えました。助教二名、博士課程留学生と共に、国内外の学術機関と協力し、ヒト免疫不全ウイルス(HIV)、B型肝炎ウイルス(HBV)、ヒトパピローマウイルス(HPV)、エンテロウイルスについて、ウイルス学的見地からの病態解明と発病予防の研究、公衆衛生学的ならびに国際保健学的アプローチによる疫学研究と感染予防対策の研究を進めています。当教室はケニアやベトナムなどから留学生や短期研修生を常時受け入れており、教室員の過半数が外国人、公用語は英語と、国際色の豊かさが特徴です。

性を身につけることが、将来、世界をリードする質の高い医学研究・医療を行う上で大きな力となる、と期待しています。

医学博士課程・海外の共同研究機関からの留学生受け入れを通して、相手国の研究能力向上や技術移転など、国際貢献に積極的に取り組んでいます。これまでに、日本(社会人を含む)、ケニア、ベトナム、フィリピンなど、多彩な背景を持った研究者が博士課程を修了し、現在は、ベトナムから三名、ケニアから二名の留学生を受け入れています。さらに、ミャンマーなどからの短期研修の受け入れも積極的に行っています。これらの実績が評価され、平成二十三年にベトナムハノイ医科大学より、平成二十四年にはハイフォン医科大学より、市村教授に「名誉教授」の称号が贈られました。今後も医学教育・研究において、海外の共同研究機関との相互連携を強化していくことを目指しています。

国立大学改革強化推進補助金事業「真の疾患予防を目指したスーパー予防医学に関する三大学(千葉・金沢・長崎)革新予防医学科学共同大学院の設置」の国際展開の一環として、平成二十七年年度から一年間、助教一名(石崎有澄美)をスイス・ジュネーブにあるWHO(世界保健機構)本部のGlobal Hepatitis Programmeに派遣しています。WHOでは、

これまでの低中所得国での疫学研究の実績を生かし、C型肝炎治療ガイドラインやB型肝炎検査ガイドラインの作成などに携わっています。

「研究紹介」HIV・ケニアとベトナムで抗HIV療法(ART)を受けているHIV感染小児における薬剤耐性遺伝子変異及びその出現パターンを継時的に解析しています。HIV母子感染やHIV感染者の病態進行に関して、CERSプロモーター領域内の一塩基多型(59356C/T)が母子感染に促進的に、またRNATES-403AAが抑制的に働くこと。日本の血友病患者において、RNATES-38Cがエイズ発症遅延に、またDC-STGZ-139Cが発症促進に関与すること。HIV感染小児ではウイルスのCR5からCXCR4へのコレセプター使用の変更はARTではなく、病態促進に関与する因子に影響を受けていること。

HIV感染小児の早期発症群では長期未発症群/遅発症群に比べHLA B*0801、HLA B*4201、HLA B*4501が高率にみられること、HIV Gag蛋白質に予想されるHLA-I T細胞エピトープが多いこと、Gag/Pol蛋白質における年間アミノ酸置換率が高いことなどを明らかにしました。さらに、ベトナムでHIV感染症におけるARTによる免疫状態の改善と至適マーカーの同定を目指した前向き研究を行っています。B型肝炎ウイルス・肝炎ウイルスはHIVと感染伝



ベトナム人医学生とミャンマーからの研修生歓迎会にて、平成27年7月1日

搬経路を共有しています。ケニアとベトナムでHIVに共感染する肝炎ウイルスの継時的な疫学調査を行い、有効な肝炎ウイルス感染予防対策の立案を目指しています。

HPV・フィリピン、日本、ベトナムで女性生産業従事者におけるHPV罹患率およびHPVサブタイプの分布、HPVのサブタイプと子宮頸癌発症の分子疫学的検討を行っています。また、ベトナムでは性感染症の症状をもつ男性でのHPV罹患率およびHPVサブタイプの分布解析を行い、HPV感染症の流行状況は同地域に住む男女間において必ずしも一致しないことを明らかにしました。ベトナム北部地域は中国南部との人の往来や交易が盛んであり、それに伴いHPVをはじめとした様々な感染症の伝搬が起きていると見られます。これらの国際共同研究で得られる結果は、HPV感染症の癌化に関する病態解明につながると共に、HPV感染症のアジア地域での感染伝搬ルート解明の一助となり得ます。

エンテロウイルス・エンテロウイルス71型は手足口病の原因ウイルスですが、アジアと日本では、手足口病の重症度が異なります。ベトナムの研究機関および東京都医学総合研究所と共同で、エンテロウイルス71感染の重症化に関する宿主・ウイルス因子の解明を目指し、前向き研究を行っています。

「おわりに」末筆となりましたが、今後も教室員一同、医学教育・研究・国際貢献のために更なる研鑽を続けていく所存です。今後とも、十全同窓会の諸先生方のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。(助教 石崎 有澄美 記)

教室だより

分子移植学

(旧)産科婦人科学

分娩、更年期とダイナミックに変化する女性特有のライフサイクルを理解することを教育の基本としています。

沿革 明治八年(一八七五年)七月にスロイスの後任として来日した、オランダ軍医ホルトマンが産科学の講義を金沢医学所で行ったことが起源とされています。以後、外山林介、佐藤廉田中信吾が産科婦人科学の教鞭をとり、産科婦人科学教室の専任教授としては明治十八年に菅沼貞吉が就任し、以後中山専太郎、山田謙治、小川勝陳、笠森周護、赤須文男、西田悦郎、井上正樹と歴代の教授が続きました。平成十三年には大学院重点化にともない、産科婦人科学教室は金沢大学医学系研究科・がん医科学専攻・機能再生学講座・分子移植学分野となりました。平成二十四年、改組に伴い金沢大学大学院医薬保健学域総合研究科・医薬保健学域医学類・分子移植学分野となり、平成二十五年六月に藤原浩教授が着任し現在に至ります。

教室 平成二十七年十一月一日現在、教授一名、准教授一名、講師一名、助教五名、医員四名、大学院生四名の総勢十六名が在籍しています。男女比は男性医師十一名、女性医師五名です。我が教室も全国で叫ばれている産婦人科医不足の例外ではなく小さな所帯ですが、その分お互いに仲が良く、皆助け合って和気あいあいと楽しく仕事をしております。

教育 修士課程：一年前期に「外科学概論」の中で「女性生殖生理」「女性の癌」を担当しています。

医学類 思春期、性成熟期女性、妊婦

分婉、更年期とダイナミックに変化する女性特有のライフサイクルを理解することを教育の基本としています。

四年生には「生殖・胎生・周産期」及び「腫瘍」の講義を行っています。特徴として近隣の関連病院の医師と提携し少人数でのグループプレクチャーを取り入れ、臨床への興味を持って学ぶことができるように工夫しています。このグループプレクチャーは学生にとっても評判がよく今後も続けて行きたいと考えています。

五年生の臨床実習(BSL)ではベッドサイドや手術室にて産婦人科疾患の治療・管理について学び、実際の医療のあり方を体験します。月曜日のオリエンテーションの後、各分野の専門医師によるミニレクチャーと症例検討会及び回診にて実地臨床の流れを理解してもらいます。その後、学生と教員医師がペアとなり五日間行動を共にし、マンツーマンの教育を行い、最終日には研修総括・発表会を施行しています。また正常分娩の症例数が多い協力病院での分娩実習も行い、産科医療の現場に触れることができるようにしています。

研究 婦人科腫瘍学、生殖医学、周産期医学の三つの分野で研究を行っています。

(1) 腫瘍学 末梢血中腫瘍細胞の同定、癌幹細胞の機能解析そして発癌メカニズムの解明を主なテーマとして行っております。末



梢血中腫瘍細胞の同定について詳述しますと、我々が以前クロニングした癌特異的に活性化している不死化関連酵素テロメララーゼの触媒サブユニットである「TERT」のプロモーターを用いたGFP発現テロメララーゼ特異的増殖型アデノウイルスを作成し新しい末梢血中腫瘍細胞の同定法を確立しました。この研究は新規バイオマーカーの探索として期待されるのみならず、転移・浸潤のメカニズム解明及び癌幹細胞についても深く関わっており高い評価を得ています。

(2) 生殖医学

生殖組織における活性化誘導シチジンデアミナーゼ(AID)の機能解析を分子遺伝子研究室(村松正道教授)と共同で研究に取り組んでおります。抗体遺伝子のクラススイッチ組換えと高頻度突然変異の主導的役割を果たしているAIDが生殖組織でも発現していることに注目し、卵巣でのAID発現の生理的意義を解明しています。これらの知見は生殖医学のみならず生命の進化につながる画期的な発見につながる可能性を秘めています。

(3) 周産期医学

胎盤形成時に出現する新規細胞の起源と機能解析を脳・肝インターフェースメディシン研究センター分子神経科学部門(河崎洋志教授)と共同で研究に取り組んでおります。この研究を通して不妊症、不育症や異常妊娠の診断・治療法の開発を目指しています。

臨床 女性の生涯にわたる健康と幸福のために幅広い領域で診療を行っています。産科、婦人科共に臨床試験の成績より得られた質の高いエビデンスに基づ

いた医療を提供しています。

(1) 産科

金沢大学附属病院周産母子センターは、高度周産期母子医療センター(地域周産期母子医療センター)としてNICU(新生児集中治療室・GCU(新生児治療回復室)を有しています。正常分娩のみならず、ハイリスク妊婦の妊娠管理・分娩管理、産褥管理を総合的に扱い、母体搬送も積極的に受け入れています。また胎児超音波外来を設けており、出生前から小児科などの関連科と密に連携し胎児管理を行っています。

(2) 婦人科

患者のQOL向上を第一に考え外来では思春期異常、更年期異常そして不妊症の患者に対して薬物療法などを用いて積極的に対応しています。体外受精が必要な場合は専門施設と密に連携し安心して妊娠できるよう心がけています。また手術については侵襲の少ない内視鏡手術を取り入れています。良性疾患だけでなく平成二十六年四月から保険適応となった腹腔鏡下悪性腫瘍手術も数多く施行しています。不妊症の原因でもある重症子宮内膜症に対する腹腔鏡下手術も行っており近隣施設から多くの症例が紹介されてきています。悪性腫瘍に対しては手術のみならず化学療法や放射線療法を行っており患者のニーズにあわせて外来化学療法を取り入れるなどQOL向上に努めています。

おわりに 藤原浩教授が就任して約二年半が経ち教室として軌道にのったところですが、研究室一同、教育、臨床そして研究に誠心誠意励んでいきます。十全同窓会の皆様方におかれましては今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

(中村 充宏 記)

十全學術行脚 第二十四回

—山梨大学—

【はつめい】

山梨大学は昭和五十三年十月一日に最後のいわゆる新設医科大学、山梨医科大学として開学し、昭和五十五年四月一日に開校しました。附属病院は昭和五十七年十二月二十日に竣工し、昭和五十八年十月十二日に診療業務を開始しております。発展を続け、平成十四年十月一日には旧山梨大学との統合により、山梨大学となり、平成十六年四月一日に国立大学法人となり現在に至っております。この間、十二名の金沢大学十全同窓会員が基礎、臨床の講座に入局し活躍されています。今回は、教授として活躍された同窓会員ならびに現教授から原稿を頂き掲載させていただきます。

一、松本由朗 現山梨大学名誉教授

(昭和三十八年卒業、平成四年、十五年、外科学講座第一教室教授)



私が山梨医科大学（山梨医大）に赴任した経緯は、昭和四十年代から始まった新設医大（一県

一医大）の方針で、山梨医大がその最後のグループとして、昭和五十五年の開校し、毎年一学年ずつ募集し（一学年百名）六年かかって完成することとなった。私

は金沢大学で主任教授だった本庄一夫先生が、京都大学へ転任されたため、大学院生の一年目であったが、共に昭和四十年に京都大学大学院に移り、修了後助手となっていた。昭和五十八年に山梨医大の開設に伴って助教教授に応募し、採用された。そのあとは平成五年教授に昇任し、平成十五年に定年退官した。藤井秀樹君（現在教授、病院長、理事）が研修医として京都から山梨へ来て、小人数（教授以下十三名）の現場で働いてくれた。最初は全く何もないところから始まったが、単に症例数のみならず、その種類が極めて豊富で、患者さんの数も多く、てくてこ舞いで働いた。その後、大学院や看護学科が増設され、大学内も一段と充実してきた。平成十四年には山梨大学と合併し、新生の山梨大学医学部が誕生した。この時から研修医は二年間となり、当初は研修医が不足し、他大学と同様に研修医不足の状況が数年続き、ようやく落ち着いてきた様である。現在山梨大学医学部は、創立三十五年を迎え、病院も新病棟の建て替えが進み、私の後任の藤井教授も昨年四月から、病院長、理事に就任し、多忙を極めている。私のもう一つの思い出は、山梨大学に馬術部を作り、一昨年二十周年を迎えた事です。馬術部長も藤井教授が引き受けて順調に成長しており、今後も三十周年に向けて充実し

ていくことと思います。私は昨年七十八歳となり、今は日々の生活を大切に過ごしております。

二、小林哲郎 現沖中記念成人病研究所所長

(昭和四十九年卒業、平成十三年、二十六年、内科学講座第三教室教授)



虎の門病院内分泌代謝科に勤務していた私は平成十三年初頭、上司より山梨医大が第三内科

科女屋教授の後任を募集中であることを知らされ、教授選に応募しました。山梨医大の内分秘グループ特に甲状腺研究は世界的なものであること、優秀な人材が集っていることを知っていたからです。幸い教授に選出され平成十三年九月より勤務を開始しました。当時の山梨医大後の山梨大学）には金沢大学出身の松本由朗教授（第一外科）大井教授（第一病理）のお二人がおられ、いろいろな面で多大なご援助をいただきました。赴任して感じたのは人材が集まっても連携が不十分なことでした。私は以後、人の和（輪）を作ることと専念し、学生を含めて若い世代の育成を心がけました。さらに、虎の門病院時代出来なかった基礎的な研究もプロジェクトをたてて行うように努め、共同研究者に恵まれいくつかの満足出来る論文を発表することが出来ました。現在も当時のプロジェクトは継続中で、私の重要な研究テーマとなっています。十三年の在任期間中には新臨床研修制度の開始があり難しい時期でもあ

りましたが、入局者は毎年絶えることなく退任前まで少しずつ増加しました。今までもそしてこれからも、山梨大学には大きなハンディがありますが、ユニークなテーマで世界と戦って行くことは可能だと実感しています。

三、大井章史 現金沢大学医学系分子細胞病理学教授

(昭和五十四年卒業、平成十年、平成十七年 病理学講座第一教室教授)



平成十年一月、大雪の安房トンネルを越えて松本經由、甲府に着いたとき、教授選考委員の先生方に感嘆された私はちよつとした英雄気取りでした。山梨医大には平成十年四月に赴任し、名称が変わった山梨大学大学院医学工学総合研究部を平成十七年三月に離任しました。この間、松本由朗、三俣昌子、田辺穰二、小林哲郎、藤井秀樹先生をはじめ同窓の先生には大変お世話になりました。病理

部には昭和五十八年の開院以来の消化器癌の外科切除標本があり、私にとってまさに宝の山でした。第一外科の主任をさされておられた松本教授はこれらを自由に使用してください、また優秀な大学院生を送りこんで頂き、おかげさまで大いに成果をあげることができました。丁度私の在学した期間は初代の教授からの次代への交代期でした。教室の創設に粉骨砕身努力された先生方が、意に反して後継者に選ばれなかった例が多々あり、申し訳ない気持ちです。現在、藤井秀樹病院長のもとで、山梨県唯一の特定機能病院として急性期医療の充実・先進医療への取り組みを進められておられます。

四、藤井秀樹 現山梨大学理事・副学長



(昭和五十四年卒業、平成十五年(二十七年、外科学講座第一教室教授)

前任の松本由

朗教授（現名誉教授）から講座を引き継いだの

で、外科学講座
第一教室はその

三十二年間の歴史のうち、二十四年間は金沢大学医学部卒業者が主宰したことになりません。金沢大学の関連施設でない大学では異例ではないかと思っています。このことは、別の観点からすると診療も研究も二十四年間継続性を持つて実践されてきたということを意味します。山梨県は日本住血吸虫という寄生虫の侵淫地区であったため、肝細胞癌の発生が東日本では最多了。私はこの肝細胞癌の治療、撲滅を目指して努力しました。その

結果私の時代には、肝細胞癌の治療成績が全国八千あまりの医療機関で最高と評価されました。また、研究では肝細胞癌の発生が多中心性であることを明らかにし、その原因が、肝クッパー細胞の活性化による酸化ストレスであることを報告し、その成果は国内外で高く評価されています。その関係で多くの教室員が海外留学しています。山梨大学出身である大村智先生がノーベル賞を受賞されましたが、私たち地方大学の目指す方向を示していたのだと思っています。今後教室は益々発展するものと確信しております。

五. 上木耕一郎 現山梨大学医学部歯科

口腔外科学講座教授



平成二十四年

三月をもつて前

任の教授が退職

されたため、教

授公募、選挙の
末、平成二十四
年十月から赴任することになりました。

はじめて山梨大学に赴任しての印象は、附属病院、医学部の建物面積が非常に古く狭いという外観上の事でした。私の金沢大学在籍中に新外来、病棟の移転が終了していましたので、さらに顕著に感じました。次第です。平成二十七年十二月には山梨大学病院の新病棟が開設となりましたが、外来や医局の新棟移転はいまだ見えきていません。さて、山梨大学医学部歯科口腔外科は、赴任当初は数人の医局員で診療を回しているのみでしたが、現在では、講師、助教、医員兼大学院生、歯科研修医を含めた医局構成で歯科口腔

外科診療および講座運営は行われてい
す。また、研究面でも全く機能していな
かった講座でしたが、当講座独自の研究
活動を確立し学術論文を少しずつ発表で
きるようになり、学位取得者をすでに四
人輩出しました。次に続く若い先生方は
全員が大学院に進学しており、研究者と
しても成熟していく事を願っています。

山梨大学医学部の歴史はまだ短く、大学
自体の独自性が確立していないように感
じます。山梨大学卒業の大村智先生が、
ノーベル医学生理学賞を受賞され全学あ
げての祝賀ムードとなっています。これ
を機に、母校に誇りを感じ社会に貢献で
きる人材、研究を輩出できるようにと願

支部だより

福井支部

平成二十七年八月三十日（日）、福井市ウエルアオッサに於いて（福井市支部担当）第六十六回金沢大学十全同窓会福井県支部総会が開催されました。一日を過ごし、小雨交じりの天候でしたが、総勢四十四名の参加でした。

見学会は少人数でしたが、養浩館次いで福井市郷土歴史博物館を訪れました。養浩館は、福井藩主松平家の別邸で、回遊式庭園は江戸中期を代表する名園の一つです。緑豊かなお庭を散策し、広大な園池では鯉に餌を与えたり、時の移ろいを感じながら暫し穏やかな時間を過ごすことができました。郷土歴史博物館では、紙製の人体模型（キュンストレーキ）男女二体あるのはここだけに注目された

う次第です。

「おわりに」

山梨大学は医学部、工学部、生命環境部（クローン技術で高名な若山照彦教授がおられます）、教育学部から構成されています。そして国の施策も影響しておりますが、医工生命の融合領域の研究が展開されようとしています。横断型の組織を形成されてきた、母校金沢大学は私たちが目指そうとしている形の大きな手本だと思っています。今後とも、十全同窓会の皆様には変わらず、ご指導、ご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

が三十分弱の時間しかなく、駆け足で十分な説明を受けられず残念な思いでした。

十四時三十分より総会が、岡田忠彦福井市支部長の司会で開催されました。まずこの一年間で亡くなられた九名の会員に対し黙祷を捧げました。次いで竹内桂一福井県支部長より挨拶がありました。続いて、来賓の中村信一同窓会会長、大井章史理事長よりご挨拶を頂きました。その中でメインプログラムナードの歴史について、樗並木等に福井市の故藤田幸雄先生のご篤志、ご功績のお蔭との説明がありました。

次いで表祝に移り、傘寿祝に福井市荒川弥二郎先生、叙勲祝に福井市森田信人先生が表祝されました。

続いて、議事に移り、平成二十六年
度会務報告並びに支部会員数、会費
納入状況



況の報告があり、協議事項で二十七年
度会務計画(案)と、予算(案)が提案さ
れ、いずれも承認されました。

次に講演会に移り、金沢大学医薬保
健研究域医学系心肺病態制御学教授竹
村博文先生より「心臓大血管手術の低
侵襲化を目指して」についてご講演を
賜りました。日本人の高齢化に伴い、手
術対象の患者さんも高齢化、重症化し
てきています。人工心肺を用いないオ
フポンプ冠動脈バイパス手術の先駆者
として貴重なご経験をわかりやすく講

演して頂きました。

記念写真を撮った後、恒例の懇親会が
盛大に開催されました。馬淵裕子さん
のジャズ演奏を約三十分間楽しみました。
小会場の演奏だった為か？少々騒々し
い感があったが、演奏終了後は来賓の先
生を含む多くの先生方がCDを購入さ
れ、持参CDは完売したとのことでした。
音楽好きの先生が多いのに驚かされ
ました。和やかな雰囲気でご話も弾み
楽しい一時でした。

次期開催支部の丹南地区鯖江市の土屋
雅之先生よりご挨拶があり来年の再会を
約束して散会となりました。

(本定 晃 記)

静岡支部

平成二十七年九月五日本部より中村裕
之教授をお招きし静岡市セリチュリーホ
テルにて支部総会が開催された。今年度
は東部地区担当(幹事加藤政利、片桐両
先生)にて開催された。中村教授より現
在の金沢大学、病院、医学部の現状の報
告と新大学院の開設などについてご説明
を戴いた。新しい大学の形を模索し努力
されているのが理解された。四十年前の
我々の時代では象牙の塔に籠もって自分
の研究に没頭していれば良かった時代と
違い現代では社会、世界の変化に合わせ
た、あるいは変化を先取りした改革を大
学も果たしていかなければ取り残された
大学になってしまう点、教員も学生も多
くの努力を要する時代になっているのが
理解出来た。会の時間の経過と共に、
学生時代の懐かしい町並みの話で盛り
上がった次第です。来年度は中部地区

担当で開催予定を確認し散会した。
ご出席戴いた先生のお名前は左記の通
りです。

中村裕之教授(昭和六十年卒業)

東部…鈴木昭夫先生(昭和二十六年卒
業)、井上慶三先生(昭和五十年卒業)、
川上明先生(昭和五十一年卒業)、加藤
政利先生(昭和五十四年卒業)、梅原靖
彦先生(昭和五十八年卒業)、片桐浩久
先生(昭和六十二年卒業)

中部…竹内正和先生(昭和二十四年卒
業)、水野洋一先生(昭和四十一年卒業)、
佐野勉先生(昭和四十四年卒業)、土屋
和弘(昭和四十四年卒業)、東茂樹先生(昭
和五十二年卒業)、徳山博士先生(昭和
五十五年卒業)、石神直之先生(昭和
五十五年卒業)、深澤洋幸先生(昭和



五十六年卒業)、大場範行先生(昭和
五十八年卒業)、小山澄美子先生(昭和
五十八年卒業)、加藤裕之先生(昭和
六十年卒業)、内田律子先生(平成九年
卒業)

西部…松田保秀先生(昭和四十三年卒
業)、金田武志先生(昭和六十一年卒業)、
望月大極先生(平成十七年卒業)

(土屋 和弘 記)

京都支部

平安神宮近くの京都ホテルオークラ
「ザ・ガーデン岡崎」にて十月十七日(日)
午後六時から開催されました。

今年は久しぶりの参加者が四名あり、
計十一名と盛会になりました。

最年長は昭和二十四年医専卒業の青木
昭先生です。今年八十九歳になられます。
お元気です。長い間、京都府の医師会を
引っ張ってこられた超ベテランです。今
は息子さんに譲って、囲碁を楽しんでお
られます。以前から本会のことに思いを
寄せてくださり、頼りない私の精神的支
えになっていたという先生です。

昭和三十八年卒業の松本由朗先生は第
一線を退かれた後、幅広い趣味の講演会
などに出席され教養を積まれています。

昭和四十一年卒業の若泉悟先生は京都
保険医事業協同組合の理事長を長らく続
けておられました。退かれた後、医院
も息子さんに譲り、今は週二回ゴルフを
され、悠々自適の生活です。

昭和四十八年卒業桑原正喜先生は滋賀
県草津総合病院の理事長のお仕事を終え
られて、京都市の南、宇治市第二岡本総
合病院呼吸器外科の開設のために移られ

ました。長年の病院経営のお仕事ご苦労様でした。

昭和五十三年卒業の小野聡先生は本会の幹事を長らくやってもらっています。彼がいなくては本会は成立しません。

同じく昭和五十三年卒業の辻和夫先生は事務的な仕事を小野先生に引き継いでもらった後、相談役としていろいろアドバイスしてもらっています。

昭和五十六年卒業の栗野菊雄先生は久しぶりの出席です。栗野先生は京大農学部卒業後修士課程も修了してから金沢大学医学部に入學されました。阪大精神科に入局し、一時フランスのリヨン大学に留学し、脳のホルモンの研究をされました。その時の思い出を冊子にされ、私も送っていただき興味深く読ませてもらいました。私もリヨンに行ってみたくなり、昨年のゴールデンウィークにフランスを旅行した折に行ってきました。第一リヨン大学の医学部まではたどり着きましたが、言葉も話せず、ただ病院内をうろろして帰ってきました。栗野先生は山岳部出身で、この日もリュックを背負って出席されました。性根の座った、「わが道を行く」先生です。

遠方からは、舞鶴共済病院長の昭和五十八年卒業布施春樹先生が出席してくださいました。昨年はどうしても都合がつかなくて、今年は必ず行くからとおっしゃって、舞鶴から駆けつけてくださいました。舞鶴共済病院は、以前はほとんどが金沢大学出身の医師が占めていたのですが、今はほんの数名で、医師の確保が本当に難しいと嘆いておられました。その中で、舞鶴の四つある病院の中核病院として頑張っておられます。

京都市の南に位置する宇治市にある、宇治おうばく病院の院長の、同じく昭和五十八年卒業の三木秀樹先生も久しぶりに参加してくださいました。地域での他科との連携に努力されいづれでも地域の精神科救急患者を受け入れる体制を作られました。僕はずっと以前ですが、休日に若者が急に精神状態が高ぶり家族も手が付けられず、近くの精神科病院を何件も電話しても受け付けてもらえず、本当に困ったことがあります。精神科の救急はめったにありませんが、あると大変です。救急体制が整っていれば本当に安心です。

昭和五十七年卒業の今井博之先生は小野先生の勧めで出席してもらっています。診療所の方も安定してきて精力的に活躍しておられます。



私、昭和三十八年卒業の八田一郎は、松本由朗君と同級です。今年は、三月に左の、九月に右の膝関節人工関節置換術をうけ、なんとか本会に出席できました。リハビリに励み、早く復帰できるように願っています。

会員への働きかけを二層強め、来年はより一層盛会になるようにと願っています。

(八田 一郎 記)

埼玉支部

二〇一五年の埼玉支部総会是小江戸情緒を遺す川越で開催され、田舎町でテロのリスク無く？参加者は過去最多の三十名を超える盛会でした。

一、総会…新しく教授に就任された松成一朗先生（埼玉医科大学核医学科）、及び矢形寛先生（埼玉医科大学総合医療センタープレストケア科）が紹介されて二人には花束贈呈され、輝かしい？経歴と今後の抱負を語られました。青年教授の将来には、士大夫として栄達を期待しました。

二、学術講演…好評の学術講演は「元気に年をとるための食と肉と油のお話」で、上尾中央病院外科腫瘍内科顧問大村健二先生が話されました。老人強化には蛋白摂取を増やすべきで、コレステロール高値はQOL良好でサバイバルに強いです。前菜の取り過ぎで肉摂取量は減るので、将来の癌予防目的の野菜ならば老人には不要、野菜よりも肉を食えとの力説です。安静時骨格筋で八五%、心筋では六五%がエネルギー源となる脂肪酸代謝に関しては、一九七〇年以降アルギルギー疾患が激増しており、マクドナルド等のコネクトール酸摂取増加が原因



です。一方では生活習慣病に厳し過ぎる政策で、理想の「ピンピンころり」に成れず、ダメ老人増加の矛盾もあります。老人に更に肉を食べさせて、科学的根拠を基に常識の逆を説く、金沢大学らしい反骨精神でした。さいたま市立病院院長代行山藤和夫先生から、手術侵襲で蛋白が破壊されるコメントを戴きました。手術ストレスで発生するサイトカインやコルチゾールが原因で、硬膜外麻酔法による痛みコントロールは、蛋白破壊予防にも

有効です。

三、特別講演…大井章史理事長による母校の最新情報報告と、「病理医からみた分子標的療法」の講演を拝聴しました。先生の得意技FISH (Fluorescence In Situ Hybridization) は、核酸プローブがゲノムの何処に着くのかを蛍光標識で検出する方法です。癌関連遺伝子の重複・欠失・転位を起こす部位を画像で示し、その遺伝子数が解かる技術らしいです。その画像が権威高い学術誌の表紙を飾る名誉となり、画像を早く送るようにとの要請を知らずに、大井先生は海外でフィッシング休暇中でした。快挙を知り慌てて帰国したけど、締め切りが既に過ぎて没となり、「釣りに出掛けたエソの工法の研究者が、逃した魚はデカかった！」と、ギャグを言っただけだったのか？金沢大学らしい大らかなユーモアで、座長は骨軟部腫瘍が専門の篠崎哲也先生のアドリブ上手で気楽に学べました。

四、懇親会…埼玉支部発足の功労者宮前達也先生の挨拶・乾杯後は、全員の近況報告や自己紹介等の楽しいスピーチを聞きました。会場が大学に近く埼玉医大教員が多数参加され、また東京や群馬からの参加者にはホンマに感謝でした。総会・講演会がユーモラスな進行で皆はリラックス、フリー歓談タイムの熱気は異常に盛り上がりました。閉会の辞は大活躍の山藤和夫先生にハッピー締めを賜りました。

参加者(卒業年と敬称は省略)…大井章史、大村健二、宮前達也、窪木外造、稲松孝思、坂井誠、菊池功次、山藤和夫、高木俊二、井上亮、川勝樹夫、小松秀邦、篠崎哲也、瀬戸幹人、中山光男、倉島一喜、

松成一朗、北野善郎、加藤直子、矢形寛、長田久人、黒須哲也、小林忠美、佐藤裕幸、新村兼康、市川聡裕、岩根弘明、河野正志、鈴木智成、塚本博和、原祐樹、以上三十一名です。

(瀬戸 幹人 記)

長野支部

近年、初冬に開催していた同窓会を平成二十七年度は十一月十四日(土)午後四時から行いました。北陸新幹線の金沢までの開通と七年に一度執り行われる善光寺の御開帳が重なり、以前より賑やかな長野駅に隣接するホテルメトロポリタン長野で行いました。

同窓会長の中村信一先生が午後三時



一分着の金沢発東京行きのはくたか五六六号で到着、要した時間は一時間三十分のことでした。長野が金沢に近づいた事を実感されたようです。

総会は出席者十二名で日程の都合で参加出来ない先生もいましたが大体例年通りの人数となりました。会の冒頭では、平成二十七年十月十三日に逝去された前長野赤十字病院副院長(泌尿器科)で、十全同窓会長長野支部長も務められた田尻伸也先生のご冥福を祈り、黙祷を捧げました。

講演には中村会長が金沢大学の改革や発展の様子と、医学部の創立百五十年記念事業の成果等を披露致しました。そのあと、出席者全員から三分間のフリースピーチで近況や抱負などを述べていただきました。

出席者の中では、いみじくも最長老になられた宮下清先生(長野市耳鼻咽喉科昭和三十一年卒業)は田尻伸也先生との思い出や、また同じ耳鼻咽喉科の医師になった息子さんと二人三脚で診療を行っている事を喜びに述べられました。

来年の大河ドラマの舞台になる上田市からは、外科を開業し現在も頑張っておられる高野利一郎先生(昭和三十一年卒業)は、学生時代に医学部のサッカークラブの創設のことや同級生の宮下先生との思い出を語られています。

同じく上田市の塚田修先生(昭和四十七年卒業)は泌尿器科で人工透析を主としたクリニックの他にも施設を併設、人工透析の分野で病院なみの規模と機能を発揮するだけでなく、自身で発明した持続注入器の特許で会社を

設立し、現在では外国にまで輸出していることを滔々と話しました。

竹前克郎先生(昭和四十九年卒業)は故田尻先生と伴に長野赤十字病院泌尿器科部長を務め定年となった後、健診を主とする病院の院長で多忙な日を送っています。

長坂正幸先生(昭和五十一年卒業)は長野市内で二番目に大きな厚生連篠ノ井総合病院の内科部長で頑張っています。

天野俊康先生(昭和五十七年卒業)は長野赤十字病院泌尿器科部長で専門の男性更年期の治療で名を馳せていますが、現在は後輩の今尾哲也先生(平成四年卒業)と手術支援ロボット(ダヴィンチ)で数多くの症例を重ねています。

現在信州大学医学部には、五人の現役教授が在籍しています。大学のある松本市からはその中の三人の教授が多忙の中を参加しました。

信州大学第二内科の田中栄司教授(昭和五十三年卒業)は、信州大学医学部の現況と大学の立場として、金沢に負けないように地域の特性を生かしながら頑張っている旨を述べました。

信州大学第一外科の宮川眞一教授(昭和五十七年卒業)は、今年三月に信州大学第一外科の開講七十周年記念行事と祝賀会を盛大なうちに行了った御礼と幕内雅敏教授及び川崎誠治教授が築いた肝移植の実績を受け継ぎ更に推し進める一方、現在は脾臓の移植についても教室として手懸けていることを披露しました。

信州大学第二外科で肺・甲状腺・乳腺外科分野の教授に就任した伊藤研一

教授（昭和六十三年卒業）は教室の伝統を生かし更に新たな教室の抱負を披露しました。

長谷部修先生（昭和五十九年卒業）は長野で消化器内科のオソソリティーとして知られ、現在は長野市民病院の副院長として多忙を極めています。

小生（神村昭和四十八年卒業外科開業）は金沢大学第二外科での手術手技で信大第一外科の医師と一緒に消化器の手術を行っています。

懇親会は長谷部先生の司会で始まり和気あいあいの中、北陸新幹線が金沢まで開業した後の賑やかさや金沢の物価が高くなり「のどぐろ」などは一・五倍になった事や、ホテルの予約がでなくなつた事など金沢の街の変遷に話題が尽きませんでした。中村会長には二次会までお付き合いただきました。二次会の店のカラオケでは宮下先生や中村会長の年の功で率先し、小生や奥ゆかしい長谷部先生は、ただただ元気に圧倒されました。明日金沢マラソンに出場予定の後輩の応援と見学で早朝に出立される予定の会長を、日付が変わらぬうちにホテルへ送り届けるという使命を忘れないのが精一杯の有り様でした。

かくして楽しくも長い平成二十七年の同窓会の日が終わりました。

（神村 盛宜 記）

岡山支部

日時…平成二十七年十二月五日
於…メルパルク岡山

平成二十七年金沢大学十全同窓会岡山支部会が十二月五日（土）、メルパ

ルク岡山において盛大に開催されました。

岡山支部では毎年この時期に同窓会を開催させていただいております。今回は懐かしい先生方に加えて、昨年金沢大学を卒業し岡山県で初期研修を行っているフレッシュな二名の参加もあり、とてもうれしく思いました。参加者は卒業年度順に昭和五十一年卒業 寺沢明夫先生、平成八年卒業 浅海浩二（筆者 岡山支部長）、平成九年卒業 高木徹先生、平成九年卒業 杉本太郎先生、平成十一年卒業 西川敏雄先生、平成十二年卒業 門田弘明先生（二次会のみ参加）、平成十二年卒業 横溝智先生、平成十三年卒業 徳毛誠樹先生、平成十三年卒業 杉山成史先生、平成二十六年卒業 金平典之先生、平成二十六年卒業 杉山博太郎先生の十一名でした。

美味しいお酒と料理をいただきながら



ら、学生時代に戻ったように金沢での懐かしい話で盛り上がり、あつという間に時間が過ぎていきました。

また来年もお会いできることを約束して、会を終了させていただきました。

今回も幹事の杉山先生に大変お世話になり無事に会を終えることができました。来年度も早めに声をかけて参加者を増やし金沢から遠く離れた岡山での金沢大学出身者の繋がりを深めてまいりたいと思います。

（浅海 浩二 記）

クラス会

昭和三十一年卒業生

同窓会報告

近年毎年開催されて来た、昭和三十一年卒業生同窓会が十月十日、高原観光地軽井沢で開催されました。

北陸新幹線開通で金沢から軽井沢まで二時間以内となり北陸在住の同級生も多数参加しました。

会場は軽井沢プリンスホテルウエストで宴会が開かれました。卒業後約六十年が過ぎ年令も八十四才に達していますが、心身共に元気なメンバーが診療や施設での仕事、家族などの話で賑やかな時を過ごしました。

宴会の後は林間に点在するコテージに移動し夜が更けるまで歓談しました。

コテージに分宿した翌日はそれぞれ軽井沢や信州の観光地をまわり帰宅しました。遠路沖縄から参加された金城君、山城君ご苦労様でした。

参加者 崎川清秀、高野利一郎、田中

康夫、田中悌夫、富永淳、中浜俊次、山城則亮以上夫妻で、朝倉志良、金城國昭、宮下清、二人で参加。以上十八名でした。来年は富永淳君の幹事で熱海で開催される予定です。

（幹事 高野 利一郎 宮下 清 記）



昭和三十三年卒業

クラス会

秋晴れの平成二十七年十月十七日（土曜日）昼、ホテル日航金沢二十九階の「桃李」に集まり食事を共にしました。卒業は昭和三十二年でしたから、もう五十八年にもなります。それでも何とか元気な顔を見ることができました。岡本行雄、小野啓安、酒井章、新谷博之夫妻、杉山正彦、田崎喜昭、同令嬢、西正美、林家資、松田嘉之夫妻、宮崎誠示夫妻、安田義顯、石丸幹夫夫妻の十七名で、大島浩太郎君が遅れて二次会に参加しました。



これまでは温泉ホテルや観光等も入れたクラス会でしたが、皆高齢に成り、バスの乗り降り、階段があったり和室での会合は大変苦手とあつてホテルにしました。また新幹線が出来て日帰りの人もあり昼食会となりました。

皆高齢ですが口だけは達者で、テークススピーチには興味深いそれぞれの人生を感じました。青春？を忘れず、若かりし頃に覚えた軍歌「同期の桜」をカラオケなしで吼えたり、人生後半ゆえに恋をしようと湯川れい子の詩を謳いあげたり（実際の歌は来年歌うと）する者もいて、時の経つのも忘れる程でした。

なお、まだ現役の人もいて、土曜の午後も戻って診療している様でした。

もう既に八十二名中三十七名が故人となり淋しいかぎりです。

今後、出来るだけ毎年クラス会を開いて、残りの人生を大切にしたいと思えます。幹事は西、杉山、宮崎、安田、菊地、石丸でした。

（西 正美 石丸 幹夫 記）



昭和三十四年卒業

クラス会開催

平成二十七年十月二十四日（土）、ホテル日航金沢で昭和三十四年卒業のクラス会が開催されました。同日隣の会場では、昭和四十三年卒業のクラス会が開かれていて、彼らの方が当然出席者も多く広い会場でした。卒業五十年記念のクラス会は、隣の会場で昭和四十四年卒業のクラス会が、四年前の奈良でのクラス会では、同じホテルで一年後輩の昭和三十五年卒業のクラス会が開催されたように、この時期は同窓会が開催されやすい時期なのかもしれません。

私たちの会合は、まず総会で幹事・上山武史君の挨拶で始まり、二年前の前回会合後に亡くなった物故者四名に黙祷を捧げました。大変残念なことですが、私たちのクラスは卒業者の四割以上が亡くなっています。先輩二年、後輩二年の五年間で最も死亡率が高くなっています。

戦争中・敗戦後に共に小学校や中学校生活を送り、食べ物もあり多くなかった時代で特に変わったこともなかったはずですが、何が原因なのでしょう？議題の一番の問題は、高齢・老齢になったので、「次回も開催するのかどうか？開催するのなら誰がどこで幹事役を引き受けるのか？」でした。喧々諤々の意見交換後、結論として、「奥田治爾君を中心として高岡市と富山県在住者が幹事役を引き受ける。開催地等の詳細は幹事に一任する」ことで全員一致しました。

写真撮影後、会員二十六名奥様六名計三十二名参加しての宴会となりました。最も遠くからの出席者が乾杯の発声をす



るという原則にしたがつて、山形県酒田市から奥様と一緒に出てきてくれた眞田稔君の音頭で乾杯後、金沢や石川県の地元産の食材を主としたご馳走を味わいました。出席者全員発言・スピーチをすることで、まだ現役で医師生活を行っている仲間がかなり多いことに感心しました。誰かが「先日、運転免許更新で、高齢者講習に行ってきた。認知機能検査も

受けた」と言った時、会場から「何点だった」との声が上がりました。「一〇〇点だった」との答えに会場からの発言者は「パソコンで調べると、四パターンの問題が出ていて、俺はそれで予習していつて受験したが、一〇〇点は取れなかった」と驚いた声でした。その数日後の新聞に、『鹿児島市に住む七十三歳の男性が約百十キロ離れた宮崎市中心街で軽乗用車を運転して歩道を約七百メートル暴走し計七人が死傷した事故で、男性は認知症で退院直後であった』と報道されたのを見て、認知機能検査の点数に関係なく私たち高齢者は他人事と考えず注意が必要だと実感しました。

宴会の楽しみの一つは、小坂登志喜君の楽器演奏・音楽です。今回は北陸新幹線金沢開業を記念して、沿線の民謡を主題として「越中おわら」「能登麦屋節」等六曲を電子サックス、オカリナ、尺八、ハーモニカ、横笛、コカリナ、とそれぞれ別々の楽器で演奏してくれました。彼の演奏中に、某君が「僕も一曲歌わせてほしい」と言つて、「この道」を歌い始めました。すると、その奥様も「私も一曲歌わせて」と言われて「からたちの花」を歌われました。最後に小坂君の演奏で「故郷」を歌い全員が斉唱して大いに盛り上がりました。

翌十月二十五日(日)は希望者十数人で、新築された医学類、記念館、病院を見学・案内して頂きました。私たちの学生時代は階段教室でしたが、今は普通の教室で、モニターが六台あって、時代の変遷を感じました。日曜日なのに、学生さんたちが教室で勉強していたのも驚きでした。病院の院長室

には歴代の病院長の写真が並んで飾っており、懐かしいかつての教授の写真を見ることができました。

ついで、一般教養時代を過ごした現在の金沢城公園を見学・観光しました。

当時は石川門(江戸時代のものが現存していて国の重要文化財に指定)だけしかありませんでしたが、石川県は北陸新幹線開業に合わせて、「金沢城三御門」を復元しました。石川門を入って直ぐ案内所の右側に「金沢大学の碑」があり来歴が書いてあります。当時、「お城の中の大学」として有名だった名残が認められますね。当時の教育学部や本部は全く無くなり、菱櫓、五十間長屋、橋爪門続櫓が復元され、さらにお堀もあり水が入っていて、参加者の中には「えー学生時代にはこんな所に水なんか無かったね」と感嘆し江戸時代にタイムスリップしたみたいです。石川門の直ぐ近くにお城の正門だった河北門が江戸時代の姿に復元されています。その坂の下にあった当時の校舎は一つも残ってはいなくて、広場になっていました。北陸新幹線開業に合わせて平成二十七年三月に復元された最も格式高く豪華な橋爪門を通して二の丸広場に出ます。「学生時代こんな所があったのかなあ?来たことがないぞ。理学部へ行く時通った道はどこだ?」と参加者の声。当時は砂利道だったところが今は舗装されてその坂の途中右手に復元された「玉泉院丸庭園」があります。「石垣の博物館」と言われる金沢城の中でも、「池泉回遊式庭園」の玉泉院丸庭園から見える色紙短冊積とV字形の石樋はどこのお城にも負けない立派な石垣だとの感があります。「唐傘」に座って庭園の絶

景を眺めて一服し観光は終了。近くのホテルで昼食を摂って解散となりました。二年後の次回クラス会に出席してその報告ができるのでしょうか?

(中村 彰 記)

「出席者」

新谷郁夫夫妻、上山武史、大家啓一、岡田良康夫妻、奥田治爾、可西右使、加納昭子、河合康守、小坂登志喜、小坂牧子、眞田稔夫妻、田中道夫、中川充宏、中村彰、中村武夫、南後千秋、西尾功夫妻、西出啓二郎、坂東平一、平松京一、福島匡昭、牧野勉、松田史郎、安元三郎、大和建昭夫妻、吉倉昌弘夫妻(五十音順)。

第五十三回さんご会

金沢で開催

去る九月二十六日、医学部昭和三十五年卒業生の同級会・さんご会が今年三月の北陸新幹線開業に因んで金沢で開催された。今年は会員が傘壽を超えた節目の年でもあり、夫人も同伴して総勢三十七名が参集した。午後三時、新装された図書館・十全記念ホールに集まり、半田君の司会で今後のさんご会の運営について協議したのち、市内に散在する医学史跡のスライド探訪を行った。四時からは山本総務副課長の案内で、新装なった記念館展示室、新附属病院を見学し、バスにて東山茶屋街にある料亭・山乃尾に移動、記念撮影のあと宴会に入る。

オープニングには、芸大邦楽科を卒業され、現在プロとして活躍中の奥村美野氏の箏曲を楽しんだあと、畑尾君の乾杯で開宴する。料理と酒が回るころ、「金沢と私」をテーマにそれぞれの近況報告

に話が弾む。二時間半の時は瞬く間に過ぎ、名残はつきぬうち坂上君の謡曲で終宴となった。卒業後毎年会を開いて今年で五十三回を数え、半世紀を超えた同級会は、これから何回開けるであろうか?全員八十歳を超えた今、答えは神のみぞ知りたもう。

(佐藤 保 記)



三六会

平成二十七年十一月二十二日(日)富山市の料亭川柳で三六同窓会が開かれました。今年は富山が当番幹事という事で、坂井修一郎君が中心となつて準備を進め、酒井清純君の薦めもあつて薬都富山らしく和食薬膳の川柳に決まりました。

宴会は越村康明君の開会の挨拶と乾杯の音頭で始まり、盃のやり取りの間に女将から薬膳の説明を聞きました。献立の中身は一部しか覚えていませんが朝鮮人参の天ぷら、さそりのから揚げ、百合根のおかき、白きくらげの耳など。はつき



り覚えていないのはお酒のせいでしょう。薬膳もさることながら席を自由に移動して、差しつつ差されつ、日頃のこと、自分の健康のことなど次から次へと話が弾んで、大変盛り上がりしました。

唯、今年も二名の友人を失いました。永年毎出席を続けていた芦原の斉藤榮宏君と香港から留学し、大阪で開業していた陳進宗君です。ここに改めて両君のご冥福を祈りたいと存じます。

会の終りに坂井修一郎君の挨拶があり、次回は予定通り再び福井での開催となります。

出席者…岩本実、臼井朋生夫妻、越村康明、小林勉、坂井修一郎、佐原吉博夫妻、寺島弘、中川正明夫妻、西野広、浜中雄二夫妻、村井中慈、柳川洋、大家他喜雄、力丸修

(寺島 弘 記)

四〇会五十周年記念 クラス会報告

石川県在住の四〇会有志が平成二十七年一月十三日金沢市内のホテルに集まり、卒業後五十年という節目のクラス会を開催することを決め、以下のように役割を分担し、準備に取り掛かった。斉藤建二(四〇会事務局・司会、津田功雄(幹事挨拶・ゴルフ)、安田清平・渡辺騎七郎(受付・市内観光)、平丸義武(二次会・スナップ写真)、加藤彰一(受付会計)、岩城紀男(観光案内パンフ・十全同窓会誌投稿)

平成二十七年十月二十四日(土)ホテル日航金沢三階「孔雀の間」においてクラス会を開催した。総勢四十六名

(内四名奥様方)の参加があり、記念撮影後斉藤建二君の司会で小坂憲司君(横浜国立大学名誉教授)の講演「第二の認知症ーレビー小体型認知症をめぐる」を聞いた。

小坂君は昭和五十一年にレビー小体型認知症の症例を世界で初めて報告し、昭和五十三年にさらに三例を発表し、その後もレビー小体型認知症(Dementia with Lewy Bodies: DLB)の体系化を図り、いまやこの疾病の世界的権威であり、その功績により平成二十五年度朝日賞を受賞した。この疾患はアルツハイマーと異なり、パーキンソン症状と幻視が見られ、頻度も多く認知症全体の二十数%を占める。予防には日常生活で頭と体をよく使うことが大切とのこと、明日は我が身、肝に銘ずべし。

その後会場の明かりをやや落とし、十四名の物故者に黙祷を捧げた(合掌)。物故者…石川義弘、矢野明、湯浅博美、伊藤一良、囀稀吉、藤田恒治、木藤光彦、平丸三樹、徳田紀久夫、本田盛貞、近澤秀幸、赤崎外志也、白藤勲、福田龍二。続いて遠方から参加の能川君の乾杯の発声後、マイクを回して全員がテーブルスピーチを行い、懐かしい学生時代のことや体調のことなどを語り合い、久しぶりの再会に宴は盛り上がった。来年は東京で河村君、小峰君に協力を求め、幹事を引き受けてくれる江畑君から挨拶があり、東京での再会を約束し、二次会となった。二次会は一階ロビーラウンジ「フアウンテン」へ移動し、飲むほどに酔い痴れ、話は弾み、あつという間に午後十一時のお開きとなった。

出席者…岩城、上田、江畑、太田、加藤、



河村、橘川、工藤、熊木、小阪(憲)、越野、斉藤、坂本、澤武、城石、高桜、高田、竹越、武田夫妻、津田夫妻、土原、中野、永川、能川、野原夫妻、早川、林、樋口、平丸、藤田、松岡夫妻、松原、

松本、三輪、水本、村上、森（紀）、森（滋）、安田、山田、渡辺

【四〇会ゴルフコンペ】

翌日は津田君の世話で片山津・加賀コースでゴルフコンペを楽しんだ。ダブルペリアで順位を決めたが、二日酔いもなんのその、アプローチをよく決めた原君が優勝、実力者の城石君はパターが不調で二位、岩城三位（ベストグロス）でした。次回の東京では、多分ゴルフコースへのアクセスが不便で、コンペ開催は困難と思われる。そのため別の機会に軽井沢あたりでコンペを企画することを申し合わせた。

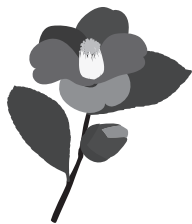
（以上 岩城 記）

津田、永川、原、早川、林、平丸、岩城

【市内観光】

“金沢大学と金沢城の発展と変貌を観る”をテーマに、宝町キャンパス（環境良好な教育棟、キンストレーキなど貴重な資料がある医学館展示室、臨床研究棟、附属病院）は山本修総務課副課長の案内を受ける。角間キャンパスは車で回り、D駐車場から建物全体を眺望。変貌した金沢城公園と玉泉院丸公園を巡り、金茶寮で治部煮など金沢を象徴する懐石料理を頂き散会。参加者：江畑、河村、小阪、澤武、中野、野原夫妻、水本、安田、渡辺

（安田 記）



久々の昭和四十二年

卒業同窓会

平成二十七年九月十二日、二日前に関東・東北豪雨の災害があつて、筑波市からの出席が心配された坂内さんの顔も見えて、同窓会が盛大に開催されました。卒業時七十七人であつたが、既に七人が逝去されての中で、四十一名の多数が参加しました。会場は、金沢市香林坊のTホテルでした。

突然、室内灯が消され、入り口から横笛の音が聞こえてきました。スポットライトが、落ち着いた和服姿の女性奏者を招き、静々と登壇されて二曲を演奏しました。古き良き金沢を想い起こして、医学生であつた青春時代に戻してくれた横笛演奏の静かな一時でした。世話人の小山さんが提案してくれたサプライズでした。

開宴に先立ち、亡くなった友に黙祷を捧げ、最も長く人生の苦楽を経験した浅野君の開会の挨拶と乾杯で、楽しい一時の幕が上がりました。卒業して四十八年が過ぎ、友によつては十年以上も会っていないと、横に座った人が誰であるのか分からず、名乗り上げることから始まり、徐々に話題が展開して、ゆつくりと時間が過ぎて行きました。

開宴間もなく、参加者全員が、一分間スピーチのマイクを持ちました。勤務医は定年までの実績と、定年後の週三回の勤務など、現在は緩やかに人生を送っている日々を語りました。中には、現役時代を引きずっている人もいました。

開業していた人達には、既に廃業していたり、中には、突然の病のため急に閉

院になったりと、現在は就業していない友が何人もいました。一方で、盛況ではないものの、地域医療を断つことができず、自ら後期高齢者になりつつある姿で診療を続けている友も目立ちました。



患者さんから、「先生もおだいじに」と励まされることがあるとの話や、診療中に処方しようとした薬剤名が思い出せずに、もたもたする状況の話も出て、笑いの中に出席者の共感を誘っていました。

友の中に、「福井から原発を止める裁判の会」で活躍している嶋田さんから、大飯原発運転差し止めの判決を得た話があり、今後の活動のために、カンパを求める袋が回りました。東京都で保険医協会の役職にある赤羽根君から、東京でも原発廃止の運動を行っているよとの力強いエールが送られました。

宴の半ば、市川君のサクソフォーンの演奏がありました。若々しい気風が同級生を励まし、アンコールもあつて、三曲を楽しむことができました。会場には、語り尽させぬ熱気が漂っていましたが、中締めとして、大西君が挨拶しました。この楽しい同級会の雰囲気は継続させたい。二年後の卒業後五十周年記念同級会を、九州の福岡市で開催してどうか」との提案があり、お開きとなりました。

退室前に、専用バスに乗り込んでの明日の市内観光（参加予定十五人）について小山さんから、また、ゴルフ大会（六人も予定されていたため、井村君からも説明がありました。閉会後は隣の部屋に移り、記念撮影をしました。二十一時、未だ友と離れがたく、階を降りての二次会会場に多くの出席者が残り、余韻を楽しみました。

（村本 信吾 記）

同窓生の消息

金沢大学医学部十全山岳会

立山山岳診療所開設六十周年記念式典

表記の記念式典は平成二十七年十一月七日(土)、紅葉が美しい立山山麓の立山国際ホテルにおいて、十全山岳会会員三十一名、現役学生十四名、富山県庁、環境庁、富山県警察山岳警備隊、立山山荘組合、国立登山研修所等関係の三十五名の計八十名が出席し、盛大に開催された。

午後五時、田辺隆一十全山岳会会長の開会の辞に始まり、森 紀喜十全山岳会名誉会長の式辞があり、立山周辺の山岳診療が昭和二十七年から本格的に始められたこと、その後昭和三十一年に、待望の診療所が地獄谷に建設されたこと、現在は剣沢、雷鳥沢、室堂の三箇所において診療活動を行っていること、今後とも多くの学生に診療所で医療の原点に触れてほしい旨が述べられた。

次いで来賓祝辞として、船平智之富山県自然保護課長、石黒雄一県厚生部参事医務課長が、立山山岳診療六十周年の節目を祝うとともに、最近の登山人口の増加とともに、立山周辺における十全山岳会ならびに金沢大学医学部立山診療班の活動の重要性がますます増してきていること、富山県へのドクターヘリの導入によってさらに山岳診療活動との連携が深まることが述べられた。

次いで物故会員に対する黙祷の後、記念講演会が行われた。記念講演会では十全山岳会の松本晴彦前診療委員長、野田透診療委員長が講演した。講演は二部構

成で、前半は山岳診療の黎明期から五十年までの歴史が、貴重で懐かしい写真を織り交ぜながら示され、後半は過去十年における山岳診療の現況が報告された。具体的には、戦前における池田知幸先生の山岳診療、戦後昭和二十四年から寺畑喜朔先生による立山での救急医療活動、昭和二十七年、医学部山岳部学生二十人による山小屋分駐診療、昭和三十一年、山岳部員の連日のボッカによる診療所の落成、昭和四十六年、剣沢診療所の開設、昭和五十六年、地獄谷診療所の閉所、昭和五十七年、雷鳥沢野営管理所内への移転、平成二十二年、室堂診療所を富山県立中央病院から継承など、活動の足跡が紹介された。そして、これまでの診療を行った患者数が一万七千名を超えること、最近の十全山岳会ならびに立山診療班の活動が山岳診療だけに留まらず、日本登山医学会での学会発表や国立登山研修所への医療講師の派遣などにも広がっていることが報告された。

この後、富山県警察山岳警備隊長の高瀬洋氏の招待講演があり、これまでの十全山岳会会員と連携し救助に当たった遭難現場を回想しながら、山岳警備隊の現状についての紹介があった。同講演の後、山岳遭難、急病に対する救助、救急のため、山岳診療と表裏一体の関係にある山岳警備隊に十全山岳会から感謝状が贈呈された。

最後に、山にちなむ歌「箱根八里」、「夏の思い出」、「穂高よき

らば」の藤村和昌十全山岳会会員による独唱が行われ、四曲目の「雪山賛歌」は参加者全員での合唱で式典を終えた。その後、記念撮影が行われ、祝宴に入った。高松英輔十全山岳会会員の開宴の辞、山岳部部長大井章史教授の乾杯の挨拶、山田真平山岳部監督の就任挨拶、北野喜行名誉会長の万歳三唱でお開きとなった。

(本学関係出席者、敬称略) 北川鉄人、北野喜行、藤村和昌、小林宣奏、森紀喜、松本晴彦、鈴木豊、高松英輔、小西孝司、久田友一郎、清水公男、神永時雄、大井章史、田辺隆一、水腰英四郎、水腰(旧姓 小林)千佳子、松本(旧姓 小熊)泰子、村松直樹、野田透、岩瀬克敏、金田礼三、澤田武、中村充宏、辻(旧姓 小西)香、吉村幸浩、金子慎哉、浦田(旧姓 武原)聡子、山田真平、清島淳、望月一太郎、岩本隼輔、吉村敬介、鹿野真代、土田航祐、谷村純、島野隼、柳澤宏嘉、山本祥博、岩田茉祐、西村和記、正村啓二郎、渡辺友二郎、荒田千尋、池田恵

(水腰 英四郎 記)



Juzen FORUM HISTORICUM

十全歴史ひろば [3]

『佐野鼎』―加賀藩近代化の知恵袋、開成学園創始

稲松孝思 (昭和四十七年卒業)

佐野鼎(貞輔、一八二九〜一八七七)は静岡県生まれの郷土の子だが、十七歳の頃江戸に出て下曾根塾で西洋砲術の修業をした。十九歳の時に塾頭まで務めた俊英で、長崎海軍伝習にも参加している。ペリー来航後、加賀藩も西洋技術の導入を図ったが、一八五四年に佐野鼎を百五十石で召し抱え「砲術師範」とした。佐野鼎は、佐幕・勤皇の間を揺れ動く藩の中で、壮猶館での教育、発機丸の運用など藩の西洋化に貢献している。十四代藩主の前田慶寧は「卯辰山養生所」を開設したが、知恵袋としての佐野の貢献が大きい。このことについて、郷土史家の徳田春秋氏にお話を聞いた。



●佐野鼎肖像写真
文久二年、三十四歳、加賀藩士、幕府の竹内遣欧使節に加わりパリにて、写真師ナダール撮影
東京大学資料編纂所所蔵

り、百五十年史では寺畑喜朝先生が、西田説を踏襲している。しかし、西田先生の時代、佐野鼎の研究はあまり進んでおらず、その後、フラーシャムN・良子さんが証拠を挙げて佐野鼎関与説を提唱している。私は学生時代以後にも西田教授の教えを受けた者であるが、卯辰山養生所の建設に佐野の影響が大きいことには賛同する。

佐野鼎は加賀藩に仕官後、藩の理解と援助を受け、幕府の遣米使節団に幕臣の益頭駿次郎の家来の名目に加わっている。帰国後「奉使米行航海日記」を十三代藩主の前田斉泰に献上している。佐野は、一年後の文久遣欧使節団にも小使兼賄の名目に加わり、藩は容認している。この訪欧使節団は、開港開市延期、日露国境交渉のほかに、実情探索をも使命としている。使節団に蕃書調所の主要スタッフの箕作秋坪や福沢諭吉が参加し、各種の施設見学、大量の書籍購入を精力的に行っている。佐野は賄い仕事に忙しく、これらの実情探索活動を横目で見ながら悔しい思いをしたことが伺える。しかし、見聞したマルタ島の英国海軍基地の新型大砲やヨーロッパの社会事情を友人たちに報告している。この遣欧使節団の成果は、帰国時の攘夷運動のため公表されていない。しかし、関係者に知識は共有されており、大きな影響を与えたと思われる。また、この九、十三か月間の二回にわたる欧米体験が、その後の加賀藩西洋化における佐野の活動の大きな力となったと思われる。

『文献』

- ・金沢大学医学部百年史
- ・金沢大学医学部五十年史
- ・長崎大学医学部五十年史
- ・松本英治(開成学園校史編纂委員会)『佐野鼎と共立学校開成の黎明(開成学園創立百三十周年記念)』平成13年
- ・フラーシャムN・良子(佐野鼎の日記と福沢諭吉の西洋事情から)『石川郷土史学会誌41号』平成二十年
- ・徳田春秋・前田慶寧と幕末維新 北国新聞社 2007
- ・相川忠臣『出島の医学 長崎文献社』徳田春秋『海を渡った侍たち 北国新聞社 平成二十三年
- ・相川忠臣『出島の医学 長崎文献社 2012
- ・稲松孝思『養育院』成立における第五代東京府知事・大久保一翁の役割 日本医史学会誌56(2):205-2010年
- ・稲松孝思『日付海防掛(蕃書調書総裁)大久保忠寛の「病院創立意見」』安政四年(一八五七)について(抄) 日本医史学会誌57(2):199-2011年
- ・稲松孝思・松下正明・大久保忠寛の「病院創立意見」(安政四年)と東京府病院(明治六十四年)について(抄) 日本医史学会誌58(2):204-2012年
- ・宮本孝一・稲松孝思・何故加賀藩屋敷に開設?養育院という名の由来はまだ解けていない養育院の謎。櫻園通信 第15号 http://www.tmg.hig.jp/hospital/about/pdf/ouen_15.pdf

式小石川養生所の計画を提言(病幼院創立意見)したことに始まる。同年、長崎の海軍伝習所でオランダ海軍医ポンペ(一八二九〜一九〇八)により系統だった西洋医学教育が始まり、一八六〇年に西洋式病院として「長崎養生所」が作られた。その後江戸に西洋式病院を作るために、ポンペの後任のボードインをオランダに帰国させ、江戸病院設立を準備させている。しかし、この間の幕府の崩壊により、江戸の西洋式病院は幻に終わった。

大久保一翁は、江戸幕府の最後の若年寄(会計総裁で事務官僚の最高責任者、勝海舟の上司)として江戸開城・七部積金を含む幕府財産の移譲を果たしたあと、静岡で徳川藩の移封に尽力している。廃藩置県後、徳川家達と共に上京し、明治五年に東京府知事に任命されている。その時にセツトで作られたのが福祉施設の「養育院」(七分積金を原資とする)と近代的病院の東京府病院(皇室下賜金を原資とし、お雇い西洋医三人を擁する)である。幕末の「病幼院創立意見」を、十五年後の明治になって実現したのである。

先に述べたように、東京の養育院は本郷の加賀藩上屋敷跡の空き長屋に仮施設が作られたのであるが、このとき、廃藩置県後上京した前田慶寧(卯辰山養生所を作った)は本郷の屋敷に住んでいた。卯辰山養生所の古地図には「養育院」の名前が見られており、両者に何らかの関連が考えられ、そこに佐野鼎の関与が疑われる。佐野と大久保の関係には、蕃書調所の人脈が関与するものと思われる。

佐野の生地の高士市では、開成学園OBを中心に佐野の顕彰碑を建てる動きが始まっている。活躍の場であった金沢にも必要なことではないだろうか考えている。

子孫による佐野鼎研究会に参加の機会を得た。

今回は佐野鼎のポーハタン号での英語修業が主題であったが、金沢の壮猶館、卯辰山養生所、水戸天狗党事件など加賀藩士時代の活躍も話題になった。また、明治維新後の東京・板橋(加賀藩下屋敷跡)の火薬製造所(陸軍砲兵工廠の前身)、本郷(加賀藩上屋敷跡)の「養育院」仮施設、共立学校創設(加賀藩中屋敷跡)などへの関与も話題になった。さらに、明治十年に虎列刺が流行した時、東京府病院においてコレラで急死したことが話題になった。

金沢大学医学部の黎明期の施設である「卯辰山養生所」の設立については、医学部百年史に西田尚紀教授が書いて

学生課外活動支援報告

西日本医科学生総合体育大会

第六十七回西日本医科学生総合体育大会は、主管関西ブロック、代表主管校大阪府立大学の運営のもと、平成二十七年八月七日から八月十九日の十三日間にわたって開催されました。開催地が大阪ということもあり、参加選手の熱中症が危惧されていましたが、終わってみると予想よりはるかに少なく、また大きな事故・怪我もなく、無事に大会を終えることが出来たと思われまます。

今大会における金沢大学の成績は、出場四十四校中十五位でした。周りの感想としては、「練習の成果が十分に表れた。頑張ったよかった」という人や、「僅差で負けてしまった。すごく悔しい」という人など様々でした。

いずれにしても、今大会に向けて仲間と共に直向きに練習に取り組んだこと、大会を通して感じ、学んだことは私たち学生にとつてかけがえのない経験になったと思います。このような機会を得られたのも十全同窓会の先生方のご支援あつてのことであり、この場をお借りしまして、ご支援いただきました関係者各位に厚く御礼申し上げます。

来年度の主管校は徳島大学で、久しぶりの四国開催となります。どの部活も選手個々人が持てる実力を全て発揮できるように精一杯頑張っていきたいと思いますので、今後ともご支援のほどよろしくお願い致します。

(主な大会成績)

優勝 男子競技スキー
女子バドミントン部

バドミントン男子ダブルス
中尾・堀内ペア

卓球男子ダブルス 西村・多嶋ペア
女子ダブルス 沼田・近藤ペア

五位入賞 男子弓道部

六位入賞 女子弓道部

七位入賞 男子陸上競技部

ベスト八 男子柔道部、男子剣道部、女子バレーボール部

ベスト十六 男子テニス部

(第六十七回)

西日本医科学生体育大会評議委員

金本 啓一郎 (記)

白山診療班

白山は富士山、立山と共に日本三霊山の一つであり、日本有数の花の山としても知られます。標高は二七〇二mにものぼり、様々な高山植物、壮大な自然の景色を楽しみに、夏山シーズンには数多くの登山者が集まります。そんな白山登山の活動基地である室堂で五十年以上にわたり診療所を開き、私達白山診療班は登山客や室堂スタッフの健康を守っています。

私達学生にとって山の上の診療所で生活することはとても貴重な体験です。登山途中や室堂付近から見える壮大な景色や、満天の星、頂上の御前峰からの御来光など、自然の美しさに感動させられます。診療所の中では、医師が診療を、学生が医師の補助や診療所内の管理を担当します。低学年の学生にとって、医師の診察や治療を間近で見たり、患者さんと接するのは初めての機会となります。学年が上がるにつれ出来る事が増え、成



長を実感できるとともに、人生の先輩である医師から様々な事を教えていただきます。また室堂スタッフと交流する事で色々な考え方を学び、視野を広げる機会にもなっております。

平成二十七年度は七月十九日から八月三十一日までの四十三日間にわたり、百二十四名の患者さんの診察を行いました。本年度も多数の先生に診療活動に参加して頂き、有難うございました。診療所を訪れた方から手紙などいただいたき、診療活動の大切さを再確認することが出来ました。今後ともできる限り学生が駐在できるようにしていきたいと思っております。

末尾ながら十全同窓会の皆様には白山診療班の活動にご支援頂き誠に有り難うございます。今後ともこの伝統ある活動が継続できるようご支援、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

(白山診療班代表 医学類四年

稲田 昇一郎 (記)

立山診療班活動報告

中部山岳国立公園内にある立山連峰は、北アルプス北部に位置する標高三千メートルの天上界で、年間にして延べ百万人もの観光客が訪れます。私たちはそのような状況下で発生する疾病・事故に対応すべく、富山県警察山岳警備隊、山小屋、環境省との連携により医師の診療活動(無償)の補助を行っています。臨床の現場を実際に見ることが出来るため、医師を志す者にとっては非常に貴重な場であり、また立山診療班の卒業生たちと現役学生が直に交流できる有意義な活動となっています。診療班員の生活は診療活動の補助だけでなく、山での食事準備や掃除、山への散策も大きなウェイトを占めており、先生方や山小屋の方々と共同生活で私達は勉学とはまた違っ



たものも学ぶことが出来ます。

今年度は北陸新幹線が開業し観光客は増加したわりには、雷鳥沢、剣沢に來た患者数は近年で最も少ない年でした。カルテを見る限り比較的軽症の方も多く、平和な年でした。しかし同時に診療班員の減少も少しずつ目立ってきています。昨年度来てくれた診療班員のリピーター率の低さ、試験やマッチングなどで多忙になっている上級生の参加率の低さがその原因かと思われまます。診療班員の勧誘や勉強会を一層充実させると同時に、これからの診療班の形を模索していきたいと思っています。またこの会報をご覧の診療班卒業生の先生方も、学生の頃を思い出しつつ避暑がてらにでも参加していただければ幸いに思います。先生方と山小屋で一緒にいる日がとても楽しみです。

最後になりましたが、OB・OGの先生方をはじめ、活動を支援してくださった皆様、十全同窓会の皆様のお陰をもちまして、本年度の活動も無事に終えることができました。厚く御礼申し上げます。

(医学類四年 吉村 敬介 記)

ACLS金沢活動報告

ACLS (Advanced Cardiovascular Life Support) 金沢は、BLS (一次救命処置) とACLS (二次救命処置) を中心とした救急蘇生法についての知識や技術を習得するために、学生同士で勉強会を行っています。BLSである心肺蘇生・AEDを用いた除細動・窒息に対する異物除去などの基本的な技術から、気管挿管・除細動などといった高度な治療

を用いたACLSまで幅広く学んでいます。講義だけでなく、実際に治療に用いる機材を使つての技術練習をするので、より臨床に近い体験ができます。全国の多くの医学部にACLS部(サークル)があり、それぞれの大学が開くワークショップ(Ws)に参加しています。

Wsを通じて私たちは多くのことを学んでいます。それは医学的な内容に留まりません。大勢での議論を時間内にまとめたり、参加者の連帯感を高めるためのアイスブレイキングを工夫したり、より効果的に記憶を定着させるためのレクチャーを考えたりしています。パワーポイントに使うフォントから配色、フィードバックに適したホワイトボードの使い方に至るまで、Wsでは非常に綿密に計算されています。そうした、普段の授業では学べないスキルを全国の仲間と切磋琢磨できることこそ、このサークルの最大の魅力の一つだと感じています。

今年度は一年生からの五人参加してくれていて、その活気に後押しされたように去年以上に活発に活動しています。三月には、福井大学で開催されたALSWs、七月には岐阜大学で開催された災害Ws、九月には愛知医科大学で開催された看護(CLSWs)、十一月には神戸大学で開催されたALSWSと各地で開催されたWsに参加してきました。その他にも、定期的に学内で勉強会を開き、胸骨圧迫や人工呼吸、気管挿管といった手技の練習をしたり、BLSやALSWsの根拠を勉強したりしています。また、今年度は福井済生会病院から竹越先生をお招きして、十一月十八日に医学類四年生を対象にAHA(American Heart Association)

の公認BLSプロバイダーコースの開催も行いました。

最後になりましたが、ご指導、ご協力くださるOB・OGの先生方や私たちの活動を支えてくださっている救急部、麻酔蘇生科そして十全同窓会の先生方、そしてAHAコース開催にあたりご尽力くださった竹越先生をはじめとする福井済生会病院の先生方に厚く御礼申し上げます。

(ACLS金沢代表 医学類四年

過外 真隆 記)



お詫びと訂正

161号の物故会員名前欄に誤りがありましたのでお詫びを申し上げ訂正させていただきます。

二頁 (誤) 立石 孝
(正) 立岩 孝

平成二十七年十全同窓会会員名簿刊行

名簿は平成二十六年度、二十七年度会費納入の方にのみ発送いたします。

未納の方は至急お納めくださいますようお願い申し上げます。

二〇一五年度 医学展開催御礼！

医学展も終わり、冬の足音が聞こえる今日この頃ですが、十全同窓会会員の諸先生方におかれましては、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

十月三十一日、十一月一日の二日間にわたって開催されました医学展二〇一五は例年と並び、五千人以上の来場者を迎えて、大盛況のうちに無事閉幕いたしました。初日には天候が不安定であるにも関わらず、大きなトラブルもなく野外イベントの全行程を行うことができ、実行委員一同胸をなでおろしました。実行委員全員の願いが届いてか、二日目には気持ちの良い秋晴れの下、予想をはるかに超えるたくさんの方に足を運んでいただ

き、当初用意していた駐車場が不足するという嬉しい悲鳴さえありました。十全同窓会の皆様方には、医学展開催に向けてご支援、ご協力を賜り、医学展実行委員会一同深く御礼申し上げます。

今年度の医学展は“antenna”かがやき発新源”をテーマに活動が続けてまいりました。このテーマには、他人から与えられるのを待つばかりではなく、学生たちそれぞれが自分自身で考え、意見を発信する存在に医学展を通じて

なつてほしいという思いと仲間から発信された思いを受信し共有できる関係を、医学展の活動のなかで作ってほしいという願いがありました。また、長い歴史をもつこの医学展が、これからも変わらず、学生たちの手によって地域の皆様に医学・医療を発信する存在であってほしいという今と未来に向けた期待もありました。このテーマに沿い、より来場者目線の校内企画のブース再編成を行い、より身近に、より記憶に残る楽しい医学展を作り上げることになりました。

委員長である私の思いではありませんが、実行委員の皆がこの医学展のなかで出会った友達と同じことに悩み、苦しみ、涙を流し、そして笑いあえる仲を築いていくくれたことを心から嬉しく思います。これからもこの経験と関係をい

つまでも大切にもち続けてくれることを望みます。医学展のこれからがどうなるのかはわたしたちにはわかりませんが、これからもたくさんさんのひとの笑顔で溢れ、学生たちを大きく成長させてくれるこの機会がこの先も受け継がれ続けてほしいと願って止みません。そしてその進化をわたしたち自身も支援していく所存でございます。最後になりますが、同窓会会員の皆様には、医学展の更なる発展のために、これからもご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

(医学展二〇一五 実行委員長

医学類五年 竹村 理璃子)



十全昔話

卒後四十年を迎えるにあたり、
思うこと

定塚 甫 (昭和四十八年卒業)

昭和四十八年、折しも学生運動のあおりで、かなり多くの学友が母校に残らず、金沢を離れたと記憶している。私もご多分に洩れず、母校を後にした一人です。

宛もなく、未知の世界を彷徨うことになったのです。しかし、案ずるより生むがやすしで、表日本に出たところ、例え札付きのワルであっても、いとも簡単に引き受けて頂け、その懐の深さに驚いた瞬間でした。

同じ境遇で出た他の二人と共に、中京地区の大学訪問を行った結果でした。此の二人は、母校では習わなかった『内分泌精神医学』を専門とされる鳩谷龍教授の三重大学精神科へ、私は、名古屋市立大学精神科への入局を許されたのでした。まず驚いたのは、そこで私を出迎えてくださったのは、脳波学の達人といわれる山村均先生（現岐阜精神病院理事長）と、ミュンヘン大学・ハイデルベルク大学（准教）から戻られたばかりの木村敏助教授（現京大名誉教授）でした。神経学に精通された先生と、精神病理学はもとより、ドイツ語では、後にシーボルト賞を授与された『ドイツ人よりドイツ語を深く理解されている方』でした。更に驚いたのは、田舎のお百姓かと思った方に呼ばれ面接を受けたのです。其の方、二十カ国語はネイティブよりスムーズに話され、世界の書籍の翻訳家と呼ばれながら、日本の外に出たことのない大橋博司教授でした。五分程度の実に大難把と思える面接でしたが、木村助教授が加わられ、「君、研修が終わったなら、ド

イツへ行きなさい、日本じゃ勉強にならないからね」と、一言しかりとした口調で言い渡されたのでした。田舎者の私には、面食らうばかりで、異次元の世界に來たようでした。さらに、その日の夕方から、すぐに「今日は、オープンセミナーですから、これに参加しなさい」と言われたのです。会場へ行って、またまた驚きでした。世界的に有名な精神病理学者であり「非定型精神病」の専門家であるProf. B. Paulichowiczの特別講義を受けることになったのでした。以降、定期的にはJung, C.G.の弟子Dora Kalff女史、エランベルジェ教授など世界有数のセミナーを受ける機会を得たのです。

このような状況の中、私は驚きを越え、完全にカルチャーショックに陥ってしまったのです。以来、来る日も、来る日も、昼は診療席、夕方からは抄読会で、ドイツ語の原著はもとより、仏語、英語と、まさに「世界を知る」という流れの中に入っていました。

奇しくも、同時代は、『精神病患者の開放運動』に突入していました。結局、二股をかけることになってしまったのです。片方では、ハイデガーからビンビンズヴァンガーなどの精神病理学の抄読会。人間とは、生ける秩序「Lebensordnung」である」と定義したハイデガー哲学に根差した人間学的精神病理学、そして、此の病理学を基礎にしたM. Bossの現存在分析学は真剣に出席し、脳波学はそこそこにして、『精神病患者の開放政策』に参画したのです（『精神神経免疫病理学』と現存在分析（総合医学社））。

先ずは、拘束された扉からの解放でした（『凍てつく閉鎖病棟』…社会批評社）。しかし、鍵のない環境で生活し、働き、遊び、結婚して行くという開放施策は、

たった一つの事件で、一瞬のうちに消え去ったのでした。精神病患者の『自由』は十年も続くことは有りませんでした。

以来、手足を挽ぎ取られたような単科の精神病院には、如何ともし難く、次は、『総合病院での精神医療立ち上げ』を命ぜられたのです。そこで、出会ったのが、『免疫』という得体の知れない存在であり、この免疫の低下により発がんが起きることが推測されたのです。急性精神病患者の尿に偶然発見されたBence Jones蛋白（Introduction to Psychoneuroimmunopathology and clinical practice: Bibliobooks, Israel）。母校をこっそり訪れ、癌研の右田俊介教授に教えを請いに行きながら、一本目の論文が『精神医学』に掲載されたのです。これと相まって、英国の雑誌にもお付き合いたいただき（Psychosomatic Research）、シカゴで開かれた学会では、会長推薦論文としてスイスの雑誌に収載されることになったのです。しかし、世には、理解不能な方がいらつしやいまして、私の意思に関わらず「推薦を辞退する」とのメールを出して不収載を求められた某大学の教授がいらしたと聞きましました。論文の内容は、『悪化時にIgE高値を認めた非定型精神病の女性について』（日本精神神経誌）でした。

其の直後、幸運にも平成五年、スイス・ベルン大学の招聘で、『ストレスとNK細胞活性・NK細胞活性とT細胞のシソーラ現象』と題した講演会が開かれ評価されるに至りました。これを知ってか知らいでか、スイスから帰って、診察室で待つていらしたのは、四十歳前後のC型ウイルス性肝臓と転移性皮膚癌女性の患者で、「大学病院で『余命一か月もあれば多いほうでしょう。思

い出を見つけてください」と放り出された方』でした（参照：Regression of hepatocellular carcinoma during psychoneuroimmunopathological therapy, Current Med. Res. & op., 日本医者はがんと闘えるのか（郁朋社））。

肝臓といえば、広島大学へ赴任されていた三年先輩の吉沢浩司教授でした。相談に相談を重ね、十五年以上を経た今日もなお、お元気でお過ごしです。その時に立ち上げた学術分野が『精神神経免疫病理学（NLM認証）』となったのです（Psychoneuroimmunopathology JPN）。

以降、末期がんの患者さんは、後を絶たず、遂に、私どもの処で十五年以上生きておられる方が十五人、他所へ変わった方、手術を受けた方は、皆さん他界なさいました。この間、ケンブリッジ大学から査読の仕事頂き、忙しさも究極に達して参りました。これらの末期がんの方々の治療には、必ず避けて通れないのが、免疫学的な確実な血液検査です。日本は勿論、世界でも一部でしか認められていない治療法ですから、患者さんに金銭を要求するわけにもいかず、遂には、借金しながらの癌治療となった次第です（Psychoneuroimmunopathology and Disease analysis 2000, Israel）。

痩せこけた末期癌の患者さんは、皆お元氣になれましたが、反対に、メタボが心配になられ笑えなくなっておられます。

最近では、欧州の講演依頼が増え、ドイツ、オーストリア、ケベックそして、今日は、ミュンヘン大学から帰ったばかりです。離れていても、常にご援助頂きました金沢の先輩ゆえと感謝申し上げます。次第です。また、ペン画展、オーボエにも頑張っております。

学生コーナー

私のなかの印象革命

医学類四年 梨田 英恵

今回こちらのコーナーで書かせていただくにあたり、何を題材にしようかと考えた結果、私は自分自身もそうである「医学生」について取り上げてみようと思いました。まず、「医学生」と聞いたときに、当の医学生以外の人たちはどのようなイメージを持つのでしょうか。検索サイトで「医学生」と入力すると、「入試が難しい」、「お金持ち」、「勉強ができる」、「真面目」など、たくさん検索結果が出てきます。他の学部に通っている友人に質問をしても同じような回答が返ってきました。傍から見ると、私たちはそのようなみられているのだということは大学に入学してから何度も痛感してきました。しかし、このイメージは医学生の実態と本当にリンクしているのでしょうか。それでは、医学生の私から見た医学部・医学生とはどのようなものなのかについて、私なりに考えてみようと思います。

入学する前の医学部のイメージは「勉強が大変」で、医学生は在学中「勉強しかしていない」ものだと思っていました。田舎育ちで、小中高と公立の学校に通い、医学部に入学する人も周囲にはほほいかなかった私にとって、将来医者になる人たちに抱くイメージなんて検索結果とほとんど変わりませんでした。

こんな私が医学部に入り、四年生も終わりに差し掛かっている現在、そのイメージがいかに変化したのか紹介しようと思います。

入学してまず実感したことは、「医学生は勉強しかしていないわけではない」

ということでした。医学生の多くが部活やサークルに参加し、大会で良い成績を残そうと練習に励んでいます。また学生の中には、私を含めお金に困っている人たちも少なからずいるので、バイトに励む人も多くいます。部活やバイトに熱が入りすぎて勉強を疎かにしてしまうのではないかと、という心配の声も上がるかもしれませんが、しかし、部活やバイトで得られる成果はわかりやすく（部活なら大会成績として、バイトなら報酬として）反映されるので、モチベーションを保つうえでこういった活動は無駄にはならず、大切な活動になっていくのではないかと私は思っています。一方で、中には熱が入りすぎてしまう人もいます。やはりある程度の自粛は必要だとも思います。

しかし学生、とりわけ医学生の本当はやはり勉強であるわけで、そこを疎かにしてしまつては医学部生活を送ることはまず不可能です。それでは次に、「医学部は勉強が大変」ということについてです。こちらのイメージは変化するどころか、そんな生易しい言葉で言い表さないでください！と思うほど大変だということがわかりました。大学受験期は、「医学部は入ってしまったらあとは何とかやる」と思っていました。入学後は涙ぐましい努力を重ねなければ進級なんてできない、ということを感じてきました。「テスト」という単語がこんなにも心に重くのしかかるものだと感じるのは、医学生ならではの感覚です。テストが辛いことばかりを述べてしまいましたが、医学部の講義は非常に魅力的な内容にもあふれています。それではここで、これまで受けてきた講義やテストの中で

大変だったことも興味深かったことも含め、私の印象に残ったトピック四について書いていこうと思います。

第四位は四年次の漢方の講義です。漢方は臨床薬理学や救急医学など、多岐の分野にまたがって多くの先生の講義を聴講する機会がありました。私の勝手なイメージで大変失礼ですが、医学部では漢方についてはまったく学ばないものだと思っていました。しかし、講義で実際に脈の触知の仕方やその判定方法、漢方の効用などを知り面白い分野なのだと興味がわきました。

第三位は二年次の組織学の講義です。組織学では、講義後に顕微鏡下で実際に組織を観察しスケッチをするという形態をとっているのですが、スケッチしなくてはならない対象が見つけれないと非常に焦ります。スケッチが終わりほとんど帰って行く友人、周囲が閑散としても見つけれず居残る私。顕微鏡を長時間覗きすぎて、顕微鏡酔いを経験した人もいるのではないのでしょうか。組織学の学習には苦しい思い出が多くありますが、その内容は非常に奥が深く、多岐の分野にまたがるためしっかりと勉強する機会を得られて良かったとも思っています。

第二位は三年次の寄生虫学の実習です。目の前に寄生虫が置かれ、それをスケッチしながら勉強するのですが、とにかくヴィジュアルが衝撃的です。多種類の害虫の標本が並べられて、その周りで学生が群れを成して必死にスケッチをします。スケッチ対象にインパクトがあることもさることながら、何よりの衝撃は、寄生虫や害虫を見ても、とくに何も感じなくなつてしまった自分自身でした。

第一位は、やはり二年次の解剖学です。

四人一班で一体の御献体を解剖させていただくのですが、四人がかりでもとにかく大変でした。人体はこんなにも複雑なのだと身を以て知ると同時に、解剖が終わる御献体を棺に戻す際や、御遺骨返還式で御遺族の方と対面した際は、私たちが御身体を使つて勉強させていただいている身であることを改めて感じました。四年生の今でも、あのころに学ばせていただいたことを何度も思い出す機会があり、また学びなおしたいと思う学問でもあります。

ここまで述べてきたように、医学生には楽しいことも辛いこともたくさんあります。辛い時期には気持ちも憂鬱になり、勉強に本腰を据えて取り組みない時期というのを何度も経験してきました。そのような時に私を励ましてくれるのは、周りの友人たちの頑張る姿です。医学部に入る以前では想像さえしていなかった医学生のイメージは、「同級生同士で励まし合っている」ということです。辛いことは共有して、一緒に進級できるように頑張ろうと励ましてくれる友人がいるからこそ、私は頑張つて行っているのだと思っています。そして私もまた、周りの友人を励ましていける人でありたいと願っています。まだ辛いことはいくつも乗り越えていかなければなりません。が、ひとつひとつをしつかりとみんな乗り越えていきたいと思います。

今の私が抱く医学生のイメージを簡単に表現するなら、「分厚い殻を持った医者の卵」です。殻を突き破ることは容易ではないと実感しつつ、みんなと一緒に離れろとうと願いながら、地道にコツコツと厚い殻をつついていこうと思っています。

第九回 金沢大学ホームカミングデイ開催

平成二十七年十一月一日(日)、本学角間キャンパスにおいて、第九回金沢大学ホームカミングデイを開催しました。歓迎式典には百七十六名、記念懇親交流会には百六十名の卒業生およびそのご家族等にご出席いただき、大変賑やかな一日になりました。

歓迎式典では、最初に、金沢大学合唱団の歌声に合わせて、出席者全員で校歌を斉唱しました。続いて、山崎光悦学長の歓迎挨拶、山出保金沢大学学友会会長の祝辞の後、向智里理事・副学長から金沢大学の近況が報告されました。その後、王安麟金沢大学中国同窓会会長によるメッセージをいただき、最後は、もりのみやと少年少女合唱団の合唱により、角間の里イメージソング「森に入ろう。」



歓迎式典で歓迎の挨拶を述べる山崎光悦学長

が披露されました。

記念講演では、「事業改革 その失敗と成功の要諦」と題し、株式会社アーク代表取締役社長鈴木康夫氏(昭和四十五年工学部卒業)に、事業改革と企業再生について、失敗例とその経験からの成功事例を時にはユーモアも交えてご講演いただきました。

記念式典終了後には、金沢大学学友会第五回役員総会が開催され、次期役員が決定しました。

夕刻から開始した記念懇親交流会は、山出保学友会会長の発声で乾杯し、楽しいひとときを過ごしました。会場では、本学薬草園で採れたハーブを使用した薬膳パスタや、金沢大学生協オリジナル日本酒が振る舞われました。途中、平成二十八年設立予定の金沢大学インドネシ

ア同窓会から、アチエップ・プルコン代表が参加し、意気込みを述べられました。その後、そろいの法被に身を包んだ卒業生有志による「金沢大学校歌」「北の都」「南下軍」の高唱もあり、会は大いに盛り上がりました。

次回、第十回金沢大学ホームカミングデイは平成二十八年秋に開催を予定していますので、懐かしい母校にぜひお越しください。

(学友支援室長 越野 衛一 記)

免除会員の先生方へのお礼

平成二十七年度 会員名簿改訂事業には、お陰様で多くの先生方からのご協力を賜りました。多大なるご協力に厚く御礼申し上げます。

金沢大学医学部十全同窓会 会報編集委員のご紹介

学内編集委員は、中村信一、山本博、山岸正和、太田哲生、蒲田敏文、中村裕之、横山茂、絹谷清剛(編集委員長)、和田隆志、佐々木素子、中西清香の十一名。

学外編集委員は山口成良、柿下正雄、津川龍三、興村哲郎、多留淳文、赤祖父一知、佐藤保、三輪晃一、橋本琢磨、勝田省吾、山本健、大村健二、横山仁、大島徹、横山修、常山幸一、中本安成、若山友彦の十八名。

以上二十九名で構成されています。

大井章史(十全同窓会理事長)には、編集委員会にご参加いただいております。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

編集後記

新年あけましておめでとうございませう。今年は例年になく暖かな日々が続いていますが、皆様方におかれましては健康にお正月を迎えられたこととお慶び申し上げます。中村信一十全同窓会会長の年頭のご挨拶の中にも述べられていますが、医学部創立百五十周年記念事業の掉尾を飾る「十全講堂から正門までのメインプロムナードの総合的整備事業」が昨秋に完成しました。そして、平成十年から推し進められてきました宝町地区再開発を象徴する附属病院建築事業が新病棟(平成十三年)、新中央診療棟(平成十七年)、新外来診療棟(平成二十一年)の完成を経て、あとは病院正面広場の環境整備工事の完了を待つだけとなりました。足かけ十九年に及ぶ工事を経て、今春には「新医学類と一体化した新しい宝町キャンパス」が誕生することになります。是非、新病院完成の記念式典に向けて、キャンパス上空から同窓会会報誌の第一面を飾るにふさわしい記念写真を撮って頂きたいものです。

ところで、昨年は「スポーツ史上最高の番狂わせ」と世界に衝撃を与えた「ラクトワールドカップ」対南アフリカ戦での日本代表の終了間際の大逆転勝利や、フィギュアスケート史上初の三百三十点超えて優勝した羽生結弦選手の話など、世界中が盛り上がった一年でありました。また、一方ではイスラム国による同時多発テロなど、憎しみが新たな憎しみを生む断ち切れない負の連鎖が世界中のどこかで頻繁に起こっていた「不安な一年」でもありました。今年こそは、世界中の人々が自分自身のなかに芽生えた負の感情をできるだけ努力して消し去る(猿)年にする事で、「報復と憎しみの連鎖」がどこかで断ち切れてくれることを心より願わざるを得ません。

新しい年が同窓会会員の皆様方にとりまして素晴らしい一年になりますよう、心よりお祈り申し上げます。(太田 哲生 記)